
鶴ヶ島市

松原前遺跡

地方特定道路（改築）整備工事（主要地方道川越坂戸毛呂山線）
関係埋蔵文化財発掘調査報告

2008

埼玉県

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 松原前遺跡全景



2 第1・2号住居跡

松原前遺跡の紹介

松原前遺跡は、東武東上線鶴ヶ島駅の北約800mにあり、標高28m～29mの台地上に立地します。県道川越坂戸毛呂山線のバイパス建設に伴って発掘調査された遺跡で、ちょうど旧道との分岐点の北側になります。地理的には、越辺川と入間川に囲まれた台地の肩部にあたり、南北を流れる2本の大谷川によって育まれた流域には、古くから多くの遺跡が営まれてきました。

今回の発掘調査は、現道と斜めに交差する細長い三角形の調査区で、僅か550㎡と狭い面積ながら縄文時代の竪穴住居跡2軒と中・近世の溝跡、土壙などの遺構が見つかりました。特に、縄文時代前期中葉（約5,500年前）の住居跡は、市内では初めての発見で、周辺の地域史に貴重な調査例を追加することができました。

序

埼玉県では、「人と自然にやさしい道づくり」を道路整備の基本理念とし、体系的な道路網の整備と総合的な交通渋滞対策、そして生活圏の拡大による広域的な交通需要に対応できる十分な交通網の整備を進めております。

県道川越坂戸毛呂山線は、川越市から鶴ヶ島市・坂戸市を經由し、毛呂山町までを結ぶ広域的な幹線道路として機能してきましたが、近年交通渋滞が著しく、早くからバイパス道路の建設が進められてきました。

この度、事業地内に縄文時代を主体とする遺跡の存在が確認されたことにより、その取り扱いについて埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず発掘調査を実施し、記録保存の処置を講ずることとなりました。発掘調査は、埼玉県県土整備部道路街路課の委託を受けて当事業団が実施いたしました。

発掘調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡とともに、中・近世の溝跡や土壇などが発見され、狭い範囲ながら大きな成果を上げることができました。特に、竪穴住居跡は縄文時代前期中葉のもので、市域では初めての発見となります。

本書は、これら発掘調査の成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護、普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として広くご活用いただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整にご尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、埼玉県県土整備部道路街路課、飯能県土整備事務所、鶴ヶ島市教育委員会並びに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成20年12月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 刈 部 博

例言

1. 本書は、鶴ヶ島市に所在する松原前遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

松原前遺跡 (MTBRME)
埼玉県鶴ヶ島市大字五味ヶ谷131-2 他
平成19年11月12日付け 教生文第2-46号
3. 発掘調査は、主要地方道川越坂戸毛呂山線整備事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査であり、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、埼玉県県土整備部道路街路課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。また、整理報告書作成事業も同課から委託を受け、当事業団が実施した。
4. 各事業の委託業務名は、下記のとおりである。

発掘調査事業 (平成19年度)
「住宅市街地基盤 (道路) 整備工事 (埋蔵文化財発掘調査委託)」
整理報告書作成事業 (平成20年度)
「地方特定道路 (改築) 整備工事 (松原前遺跡埋蔵文化財発掘調査 (整理) 業務委託)」
5. 発掘調査・整理報告書作成事業は、I-3の組織により実施した。

発掘調査は、平成19年11月1日から12月28日まで宮井英一が担当して実施した。
- 整理報告書作成事業は、平成20年9月1日から10月31日まで宮井が担当して実施し、平成20年12月に事業団報告書第357集として印刷・刊行した。
6. 発掘調査における基準点測量は、株式会社ビッソ測量設計に委託した。また、空中写真撮影は中央航業株式会社に委託した。
7. 発掘調査における写真撮影および出土品の写真撮影は宮井が行った。
8. 出土品の整理・図版作成は宮井が行い、鈴木孝之・西井幸雄・上野真由美・松本美佐子の協力を得た。
10. 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、IVの旧石器時代遺物を西井、中・近世遺物を鈴木、縄文土器の実測とVの2を松本、その他を宮井が行った。
11. 本書の編集は、宮井が行った。
12. 本書に掲載した資料は、平成21年1月以降埼玉県教育委員会が管理・保管する。
13. 発掘調査、本書の作成にあたり、下記の機関・方々からご教示・ご協力を賜った。記して感謝いたします (敬称略)。

鶴ヶ島市教育委員会 齊藤 稔・清水理史
鶴ヶ島市東公民館

凡 例

1. 本書におけるX・Yの数値は、世界測地系(新測地系)による国土標準平面直角座標第IX系(原点北緯36°00′00″、東経139°50′00″)に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位は、すべて座標北を示す。

今回の調査でベンチマークとしたG 4グリッド北西杭の座標は、X=-6180.000m、Y=-37140.000m(北緯35°56′36″.9312、東経139°25′18″.0074)で、杭上の標高は28.855mである。
2. 調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく10m×10mの範囲を基本(1グリッド)としている。
3. グリッド名称は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット(A・B・C…)、西から東方向に数字(1・2・3…)を付し、両者を組み合わせて呼称した。
4. 本書の本文、挿図、表中に記した遺構の略号は、以下のとおりである。

SJ…竪穴住居跡
SD…溝跡
SK…土壇
P…ピット(小穴・柱穴)
TP…旧石器調査区
5. 発掘調査現場での土層の色判定には「新版 標準土色帖」(日本色研事業株式会社)を使用し、土層説明では、「褐色 7.5YR 4/3」のように各色票の「色名」および「色相 明度/彩度」で示した。
6. 本書における挿図の縮尺は、原則として以下のとおりであるが、一部例外もある。縮率は、個々の図面内に記す。

全測図 1/300
遺構図 1/60
遺物実測図・拓本 1/3
金属器 1/2
7. 遺構断面図に表記した水準数値は、海拔標高を示す。
8. 本書に使用した地図は、国土地理院発行1/25,000地形図及び鶴ヶ島市都市計画図(1/2,500)である。
9. 文中の引用文献等は、(著者 発行年)の順で表現し、その他の参考文献とともに巻末に一覧を掲載した。

目次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	(2) 土壌	27
1. 発掘調査に至る経過	1	(3) グリッド出土遺物	28
2. 発掘調査、報告書作成の経過	2	3. 中・近世	30
3. 発掘調査、報告書作成の組織	2	(1) 溝跡	30
II 遺跡の立地と環境	3	(2) 土壌	30
III 遺跡の概要	7	(3) ピット	36
IV 遺構と遺物	13	(4) 中・近世の遺物	37
1. 旧石器時代	13	V 調査のまとめ	41
2. 縄文時代	14	写真図版	
(1) 住居跡	14	抄録	

挿図目次

第1図 埼玉の地形	3	第15図 第2号住居跡	22
第2図 周辺の遺跡	5	第16図 第2号住居跡遺物出土状況	23
第3図 遺跡位置図	8	第17図 第2号住居跡出土遺物(1)	24
第4図 調査範囲図	9	第18図 第2号住居跡出土遺物(2)	26
第5図 調査区全測図	11	第19図 第23号土壌	27
第6図 基本層序	12	第20図 グリッド出土遺物	29
第7図 旧石器時代の遺物	13	第21図 第1号溝跡	31
第8図 旧石器調査区	13	第22図 土壌・ピット配置図	32
第9図 第1号住居跡	15	第23図 土壌(1)	33
第10図 第1号住居跡遺物出土状況	16	第24図 土壌(2)	35
第11図 第1号住居跡出土遺物(1)	17	第25図 ピット群	36
第12図 第1号住居跡出土遺物(2)	19	第26図 中・近世の出土遺物(1)	38
第13図 第1号住居跡出土遺物(3)	20	第27図 中・近世の出土遺物(2)	39
第14図 第1号住居跡出土遺物(4)	21		

表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧	4	第2表 ピット計測表	36
-------------	---	------------	----

写 真 図 版 目 次

図版1	1	調査前の松原前遺跡	図版8	1	第19号土壇完掘状況
	2	調査区遠景(空中写真)		2	第20号土壇完掘状況
図版2	1	第1号住居跡遺物出土状況		3	第21号土壇完掘状況
	2	第2号住居跡遺物出土状況		4	第22号土壇完掘状況
図版3	1	第1号住居跡完掘状況		5	第23号土壇完掘状況
	2	第2号住居跡完掘状況		6	第24号土壇完掘状況
図版4	1	第1・2号住居跡完掘状況		7	第25号土壇完掘状況
	2	第1・2号住居跡掘り方		8	第26号土壇完掘状況
図版5	1	第1号溝跡完掘状況	図版9	1	第1号住居跡出土遺物(第11図1)
	2	土壇群完掘状況		2	第1号住居跡出土遺物(第11図2)
図版6	1	第1・2号土壇完掘状況		3	第1号住居跡出土遺物(第11図3)
	2	第3号土壇完掘状況		4	第1号住居跡出土遺物(第11図4)
	3	第4号土壇完掘状況		5	第1号住居跡出土遺物(第11図)
	4	第5・6号土壇完掘状況	図版10	1	第1号住居跡出土遺物(第12図)
	5	第7号土壇完掘状況		2	第1号住居跡出土遺物(第12図)
	6	第8号土壇完掘状況	図版11	1	第1号住居跡出土遺物(第13図)
	7	第9号土壇完掘状況		2	第1号住居跡出土遺物(第13図)
	8	第10号土壇完掘状況	図版12	1	第2号住居跡出土遺物(第17図)
図版7	1	第11号土壇完掘状況		2	第2号住居跡出土遺物(第17図)
	2	第12号土壇完掘状況	図版13	1	第2号住居跡出土遺物(第17・20図)
	3	第13号土壇完掘状況		2	出土遺物抜粋(拡大)
	4	第14号土壇完掘状況	図版14	1	グリッド出土遺物(第20図)
	5	第15号土壇完掘状況		2	グリッド出土遺物(第20図)
	6	第16号土壇完掘状況	図版15	1	中・近世遺物(1)(第26・27図)
	7	第17号土壇完掘状況		2	中・近世遺物(2)(第26・27図)
	8	第18号土壇完掘状況	図版16	1	中・近世遺物(3)(第26・27図)
				2	中・近世遺物(4)(第26・27図)
				3	中・近世遺物(5)(第26・27図)

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では、「環境優先」「生活重視」といった基本理念に基づき、快適で利便性の高い道路整備を推進している。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、県が実施するこうした公共開発事業に係る埋蔵文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

本報告書に係る住宅市街地基盤（道路）整備工事川越坂戸毛呂山線は、環境に十分配慮した安全・快適で潤いのある道路空間をめざして計画されたもので、当該事業の実施に先立ち、道路街路課長より平成19年7月9日付け道街第175号で、埋蔵文化財の所在及びその取扱いについて、生涯学習文化財課長あて照会があった。生涯学習文化財課は平成19年8月24日に遺跡所在及び範囲等確認のための試掘調査を実施した。その結果、埋蔵文化財の所在が明確になったことから、平成19年9月11日付け教生文第1374号で次の内容の回答を行った。

1 埋蔵文化財の所在

名称（NO）	種別	時代	所在地
松原前遺跡 (31-022)	集落跡	縄文・古墳	鶴ヶ島市大字五味ヶ谷

2 法手続

工事予定地内には、上記の埋蔵文化財包蔵地が所在しますので、工事着手に先立ち、文化財保護法第94条の規定による発掘通知を提出してください。

3 取扱い

「発掘調査が必要な区域」については、工事計

画上やむを得ず現状を変更する場合には、記録保存のための発掘調査を実施してください。

「工事に着手して差し支えない区域」については、埋蔵文化財が所在しませんので工事に着手して差し支えありません。工事中に新たに埋蔵文化財を発見した場合は、直ちに工事を中止して、取扱いについて当課と協議してください。

道路街路課と生涯学習文化財課・鶴ヶ島市教育委員会は、その取扱いについて協議を重ね、現状保存は困難であることから記録保存の措置を講ずることになった。その後、発掘調査実施機関である（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、道路街路課・生涯学習文化財課の三者で工事日程、調査計画、調査期間などについて協議した。

文化財保護法第94条1項の規定による埋蔵文化財発掘通知が飯能県土整備事務所長から提出され、同条4項の規定により、記録保存のための発掘調査を実施するよう埼玉県教育委員会教育長から通知した。その後、第92条1項の規定による発掘調査届が（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出され、発掘調査が実施された。

発掘通知及び発掘調査届に対する県教育委員会教育長からの勧告及び指示通知は次のとおりである。

発掘通知に対する勧告：

平成19年11月12日付け教生文第3-680号

発掘調査届に対する指示通知：

平成19年11月12日付け教生文第2-46号

(埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

松原前遺跡の発掘調査は、主要地方道川越坂戸毛呂山線のバイパス工事に伴うもので、平成19年11月1日から平成19年12月28日まで実施した。調査面積は550㎡である。

10月下旬から事務手続き等の準備を開始し、11月1日から順次事務所設置工事・囲柵工事等を実施した。また、並行して重機による表土除去作業を行った。

11月9日から、遺構実測作業のための基準点測量及びグリッド杭敷設作業を実施した。なお、グリッドは10m方眼とし、調査区北西隅を基準にA-1からH-5グリッドを設定した。

表土除去終了後、人力による遺構確認作業を行ったところ、調査区北側で南北に走る溝跡1条、同南側で竪穴住居跡2軒と土壇・ピット等が検出されたため、直ちに遺構の精査を開始し、順次土層断面図・平面図等の作成及び写真撮影等の記録作業を行った。

遺構の調査終了後、航空機による空中写真撮影を実施した。

全ての記録作業を終了し、12月28日までに事務所の撤去及び事務手続き等を行い、すべての作業を完了した。

(2) 整理・報告書の作成

松原前遺跡の整理作業は、平成20年9月1日から平成20年10月31日まで実施した。

作業はまず、出土遺物の水洗・注記作業を行い、その後、遺構を中心に接合・復元作業を実施した。

遺構図面に関しては、各種実測図の整合性をとった上で作成した第二原図をデジタル化し、コンピュータ上でトレース作業を行った。

土器・石器等の遺物に関しては、それぞれ分類・抽出し、実測図および拓影図（破片など）を作成した。また、抽出した資料は写真撮影し、発掘調査時の遺構写真とともに写真図版の版下とした。

10月中旬から図面・写真・本文の割付作業と原稿執筆を進め、下旬には印刷業者を選定して入稿した。校正は3回行い、平成20年12月に報告書を刊行した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成19年度（発掘調査）

理事長	刈部博	調査部	
常務理事兼総務部長	岸本洋一	調査部長	村田健二
総務部		調査部副部長	磯崎一
総務部副部長	昼間孝志	調査第一課長	金子直行
総務課長	松盛孝	整理第一課長	宮井英一

平成20年度（報告書作成）

理事長	刈部博	調査部	
常務理事兼総務部長	萩元信隆	調査部長	村田健二
総務部		調査部副部長	磯崎一
総務部副部長	昼間孝志	整理第一課長	宮井英一
総務課長	松盛孝		

II 遺跡の立地と環境

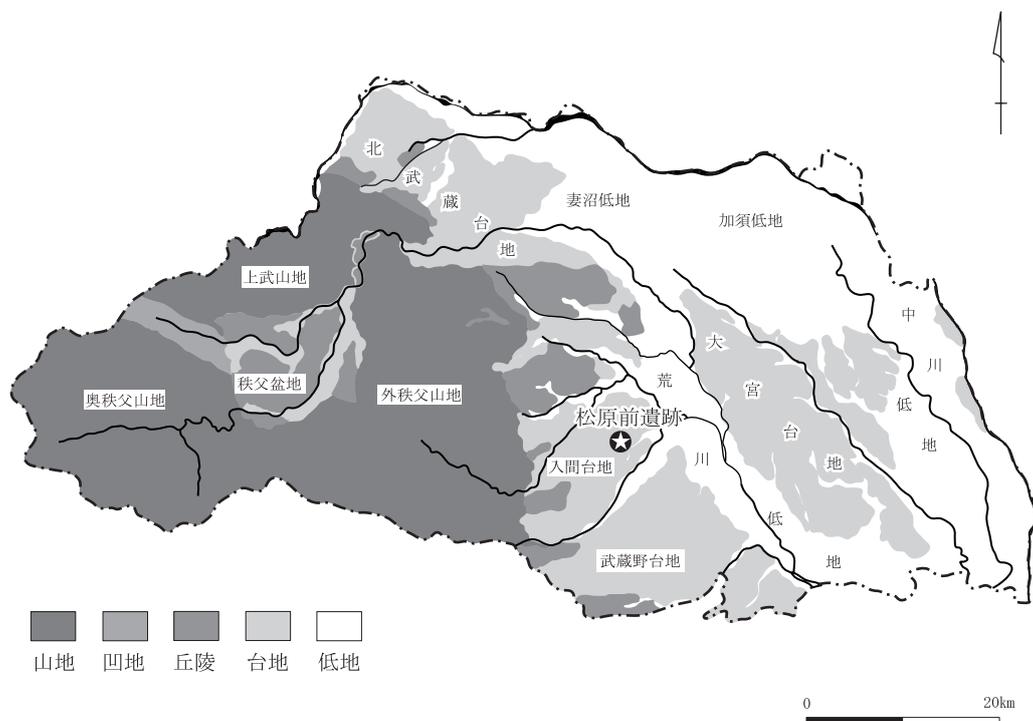
1. 地理的環境

松原前遺跡の所在する鶴ヶ島市は、埼玉県のほぼ中央に位置し、北側から反時計回りに坂戸市、毛呂山町、日高市と接し、南側と東側のほとんどは川越市と接している。約40kmを隔てる首都圏とは、市域を南北に貫く関越自動車道および東武東上線によって結ばれており、西方へは東武越生線が走り、更に八高線に接続する。また、遺跡自体は、東武東上線鶴ヶ島駅の北方約800mに所在するが、市域の中では東端に位置し、東へ500mほどで川越市域に入る。

遺跡は、いわゆる入間台地上に立地する。北を高麗川と越辺川、南を入間川によって画され、南西から北東方向に発達した台地で、入間川を挟んで南側に広がる武蔵野台地と対峙する。比較的起伏の少ない平坦な地形で、全体的に東に向かって緩やかに傾斜しており、市域における標高は、西

部で約47m、北東部で26mほどである。外秩父山地に源流をもち、入間台地を取り巻くように流れる三筋の河川は、その周囲に肥沃な沖積地を発達させ、それはとりもなおさず広大な耕作地として連綿と利用されている。やがて高麗川は越辺川と合流した後、川越市北部で入間川とも合流し、現在は更に荒川と一つになって東京湾に向かっている。

なお、市域部分は、古く高麗川によって形成された扇状地（高麗川扇状地）の扇中央部にあたり、坂戸・鶴ヶ島台地とも称される。南側を画する小畔川を除けば台地上に大きな河川はないものの、秩父山地からの伏流水に起因する湧水が多く、それを源とした小河川沿いには数多くの遺跡が形成されている。一つは、遺跡のすぐ北側を東流する大谷川で、鶴ヶ島市南端にあたる埼玉県立農業大



第1図 埼玉の地形

学校付近に端を発し、逆木ノ池や太田ヶ谷池などの溜池を形成しながら北東へ向かい、やがて旧小畔川とともに越辺川に合流する。また、市の南西部の高倉にある「おかねが井戸」に端を発する飯盛川は、池尻池や雷電池などの溜池を残しながら北流し、坂戸市北部で方向を東に変え、同じく越辺川に注いでいる。

但し、両河川とも規模は小さく、沖積土の堆積もほとんど見られない。比較的平坦で水はけのよい台地の表面は、最近の植生や耕作などによる腐植土によって広く覆われているが、その下には立川ローム層および武蔵野ローム層にあたる赤土層が数メートルの厚さで堆積し、更にその下には下末吉ローム層に相当すると思われる粘土層が確認されている。

2. 歴史的環境

本項では、松原前遺跡で遺構・遺物の発見された旧石器時代と縄文時代および中・近世について、遺跡が立地する坂戸・鶴ヶ島台地を中心に簡単に触れることにする。

(1) 旧石器時代

本市域における旧石器時代の遺跡としては、従来から鶴ヶ丘遺跡（谷井1976・岩瀬1985）が著名である。小畔川左岸の細長い舌状台地上に立地する遺跡で、ナイフ形石器を主体とする多数の石器が出土し、いわゆる砂川期の遺跡として知られている。但し、その他の発掘調査の成果としては、お寺山遺跡（齊藤他1985）・若葉台遺跡（鶴ヶ島町1991）・鶴ヶ島中学西遺跡（早川1997）などで少量の石器の出土が確認されているのみで、旧石器時

代遺跡数は、近年の首都圏中央連絡自動車道（圏央道）建設に伴う発掘調査によって一挙に増加した感がある。市域の遺跡を圏央道に沿って南から辿れば、新山遺跡・青棚遺跡・横田遺跡・柳戸遺跡（34）（以上西井1995・田中1995）と、わずか2km弱の間に5遺跡が発見されており、路線上の直線的な調査であることを考慮すれば、本台地上での濃密な分布状況が窺われよう。また、いずれの遺跡も旧石器時代終末期の細石器および尖頭器の資料が検出されているが、特に横田遺跡は質・量ともに群を抜く中心的な存在で、石器集中17ヶ所、礫群4ヶ所のほか尖頭器石器の製作跡が確認されている。

なお、同じく圏央道新設に伴って平成17～18年度に調査された木曾免遺跡（篠田2008）や御新田遺跡（8）、番匠・下道遺跡（黒坂2008）でも同時期の遺跡が確認されている。特に御新田遺跡では、槍先形尖頭器などの製品13点を含む92点の石器が集中して出土しており、黒曜石や玉髓の組成比率が高い点も注目される。

また、圏央道に関連する調査ではないが、柳戸遺跡の北方約600mの地点で同時期の遺跡が調査されている。市道富士見通線の工事に伴って調査された泉橋遺跡（33、関口2003）で、石器集中や礫群をともない、槌状剝離の尖頭器が出土している。

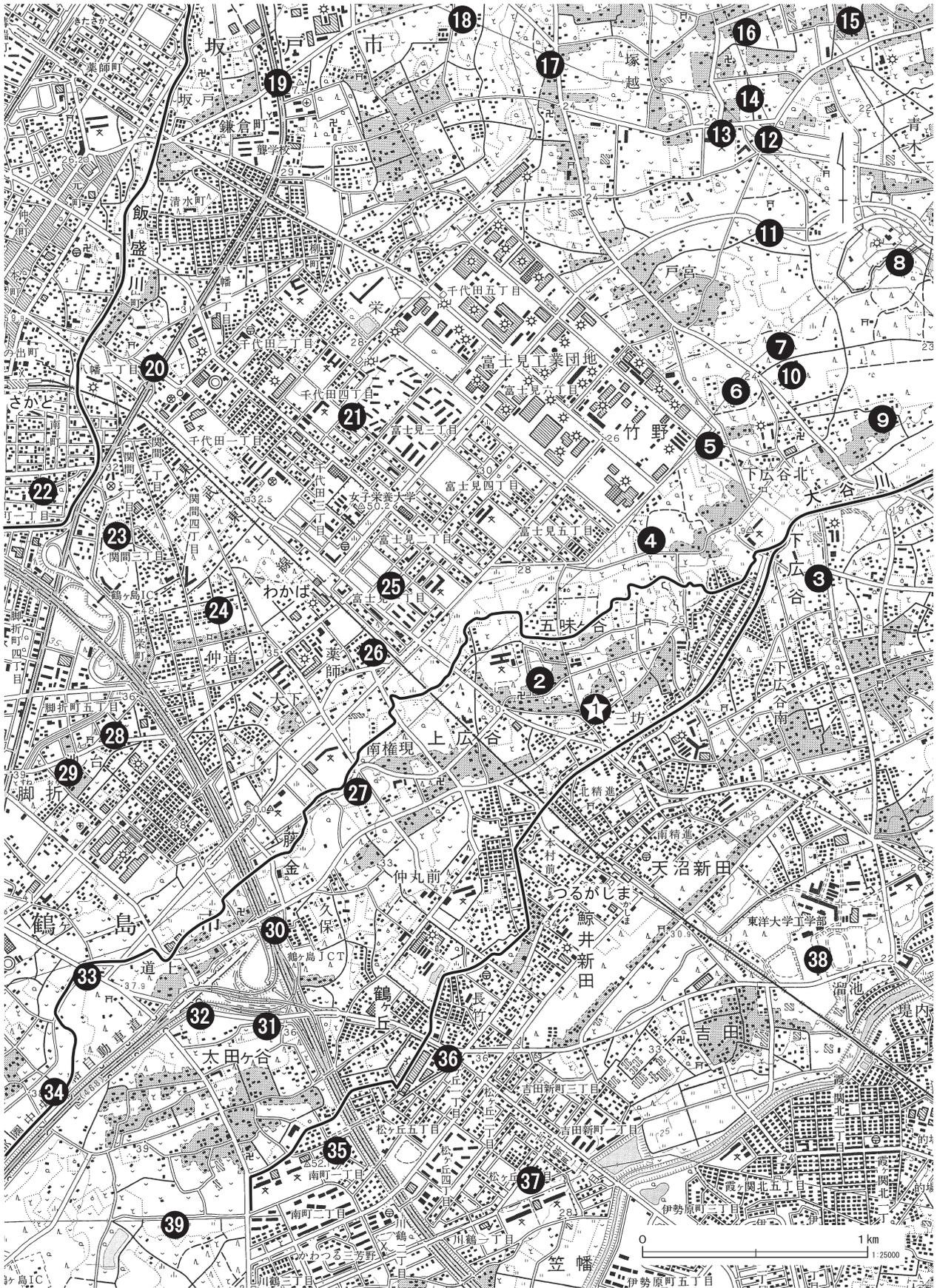
(2) 縄文時代

縄文時代の黎明期、いわゆる草創期の遺跡は極めて少なく、僅かに鶴ヶ島中学西遺跡（齊藤・早川1998）・地慶沼遺跡（39・清水2003）で土器小片が発見されているに過ぎない。

周辺の遺跡

1 松原前遺跡 2 岸田氏館跡 3 古街道東遺跡 4 宮廻館跡 5 在家遺跡 6 戸宮前遺跡 7 牛原遺跡 8 御新田遺跡 9 宮前遺跡 10 大堀山館跡 11 精進場遺跡 12 宮町遺跡 13 住吉中学校遺跡 14 青木堀ノ内遺跡 15 雷電塚古墳群 16 明泉遺跡 17 塚越古墳群 18 柵遺跡 19 相撲場遺跡 20 山田遺跡 21 若葉台遺跡 22 天狗遺跡 23 鶴ヶ岡遺跡 24 仲道柴山遺跡 25 富士見一丁目遺跡 26 北権現遺跡 27 岸田氏屋敷 28 雷電池東遺跡 29 池の台A遺跡 30 道上遺跡 31 後B遺跡 32 後A遺跡 33 泉橋遺跡 34 柳戸遺跡 35 お寺山遺跡 36 鶴ヶ丘第48号遺跡 37 鶴ヶ丘遺跡 38 東洋大学構内遺跡 39 地慶沼遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧



第2図 周辺の遺跡

当台地の縄文時代遺跡数は、早期に入って急増する。撚糸文期では、鶴ヶ島中学西遺跡や雷電池東遺跡(28)(齊藤他1985)、お寺山遺跡(35)(齊藤他1985)などが古くから知られているが、近年の調査成果としては、木曾免遺跡や番匠・下道遺跡、御新田遺跡(8)、泉橋遺跡(33)、北権現遺跡(26)(齊藤・関口2002)などの遺跡を挙げることができる。何れも台地内部に占地するが、圏央道関係の遺跡は同じ撚糸文期でも末葉のものが主体を占め、泉橋遺跡や北権現遺跡では、貝殻条痕文系の土器も多数出土している。

縄文時代前期の遺跡は、坂戸市域に点在する。前半の関山期の遺跡は、附島遺跡(加藤1985)、木曾免遺跡(加藤他1987)、景台遺跡(加藤1997)など比較的台地の先端部付近に占地し、後半の黒浜期では、番匠・下道遺跡、御新田遺跡(8)、横田遺跡など大谷川流域の遺跡が挙げられる。但し、鶴ヶ島市域では、本期の遺跡は極めて少なく、雷電池東遺跡(28)や若葉台遺跡(21)、お寺山遺跡(35)、泉橋遺跡(33)などで僅かな土器片が出土しているのみで竪穴住居跡が確認されたのは本遺跡が初めてである。

縄文時代中期の坂戸・鶴ヶ島台地上では、その中葉にあたる勝坂式期から加曾利E式期にかけての遺跡が散見される。古くは川越市東洋大学構内遺跡(38 小泉他1972)や坂戸市上谷遺跡(伊藤他1983)などが知られており、近年の調査例では、坂戸市景台遺跡(加藤他1991、加藤1997・1999)や圏央道新設に伴って調査された牛原遺跡(7)、御新田遺跡(8)などが挙げられよう。景台遺跡や牛原遺跡では、勝坂式期を中心とする遺構が環状に配されるようである(註)。また牛原遺跡は、巨大な平石を用いた中期末葉の敷石住居跡で注目されるが、中期後半の加曾利E式期になると、市域でも飯盛川流域でいくつかの遺跡が確認されている。最も上流に位置する新右衛門遺跡(齊藤他1993)から川沿いに、鶴ヶ島中学西遺跡、脚折山

田遺跡(齊藤1978)と並び、加曾利E I～E III期の住居跡が発見されているが、これらに続く遺跡は少なく、鶴ヶ島中学西遺跡で縄文時代後期の称名寺式・加曾利B式期の土器片が確認されている程度である。

(3) 中・近世

本遺跡の東に広がる広谷郷は、15世紀代の中世城館跡が集中することで知られる。大谷川左岸に西から宮廻館跡(4、木戸2004・大谷2008)、戸宮前館跡(6、木戸2004)、県指定史跡の大堀山館跡(10、川越市教委2005)、宮前館跡(9、関口1990)と弧を描くように配置され、更に宮前館跡の大谷川を挟んだ対岸には大穴城跡(関口1990)が存在する。また、大堀山館跡と宮前館跡の間には、南北にはしる鎌倉街道堀兼道の存在が推定されており、近年の調査で、約1km南の古海道東遺跡(3、内田2007)からも中世の道路跡が発見されている。このように中世における交通の要衝に位置する城館跡群は、また15世紀後半における山内・扇谷の両上杉氏と古河公方(足利氏)の争いや、その後の河越城をめぐる後北条氏との抗争などを背景に築城されたものであった。なお、市内の中世村落については、今までも数多くの集落が指摘されているが、そのうちお寺山遺跡(35)、北権現遺跡(26、齊藤・関口2002、清水2007)、当貫遺跡(齊藤他1999)、小萱野遺跡(齊藤・早川2002)などをはじめとする遺跡については発掘調査も実施され、その生活の一端が明らかにされつつある。

一方、遺跡周辺に目を向けると、近世初期の有力土豪である岸田氏の存在が注目される。扇谷上杉氏に連なると伝えられ、天文15年の河越夜戦の後この地に帰農したものと思われるが、本遺跡の北西300mに岸田氏館跡(2)、西方約1kmには岸田氏屋敷(27)が存在する。

(註) 景台遺跡は、平成20年度に当事業団が調査しており、更に13軒の住居跡が追加されている。

III 遺跡の概要

松原前遺跡は、鶴ヶ島市五味ヶ谷に所在し、東武東上線鶴ヶ島駅の北方約800m、市立杉下小学校の南東300mに位置する。発掘調査は、県道川越坂戸毛呂山線のバイパス建設工事に伴うもので、平成19年11月から2ヶ月間実施された。

川越坂戸毛呂山線は、川越市役所付近を起点に鶴ヶ島、坂戸を経由して毛呂山駅まで、東武東上線及び東武越生線に沿い、その北側を緩やかな弧を描くように東西にはしる主要地方道である。しかし近年、特に線路と併走する坂戸・鶴ヶ島市域の混雑が著しいことから、それらを大きく迂回するバイパス道路が計画され、本遺跡はその東端、現道と分岐するあたりで発見された。

地形的には、南北を入間川と越辺川に挟まれた入間台地の東側で、東南方の入間川に向かって緩やかに傾斜する台地上に立地する。現在この入間台地の西北部には、外秩父山系から流れ出た高麗川が蛇行しながら北流しているが、坂戸・鶴ヶ島市域付近は、古くはこの高麗川によって形成された扇状地の扇央部にあたり、坂戸・鶴ヶ島台地とも呼ばれている。調査地点の標高は28~29mである。

発掘調査区は、バイパス予定区域と現道(市道)が斜めに交差する部分で、北に頂点を向けた細長い三角形を呈し、底辺14m、高さ75mほどで、総面積は550㎡である(第5図)。また、調査区には国土標準平面直角座標に基づく10m×10mの方眼を設定し、北西隅を基点に、A1からH5グリッドと呼称した(第6図)。

検出された遺構は、竪穴住居跡2軒のほか溝跡1条・土壇26基・ピット9基である。

竪穴住居跡は、調査区の南側で大小2軒の住居跡が南北に並んで検出された。何れも縄文時代前期中葉の黒浜式期のもので、同期の土器が遺構の内外から多量に出土している。北側の第1号住居

跡は、この時期に特有な台形の住居で、4本の柱穴と炉跡が検出された。南側の第2号住居跡は、小型で形状も整っていないが、掘り込みは第1号住居跡より深く、炉跡も見つかっている。なお、2軒は、一部が重なり合うようにして検出されたが、土層確認の結果、第1号住居跡の方が新しいことが判明した。

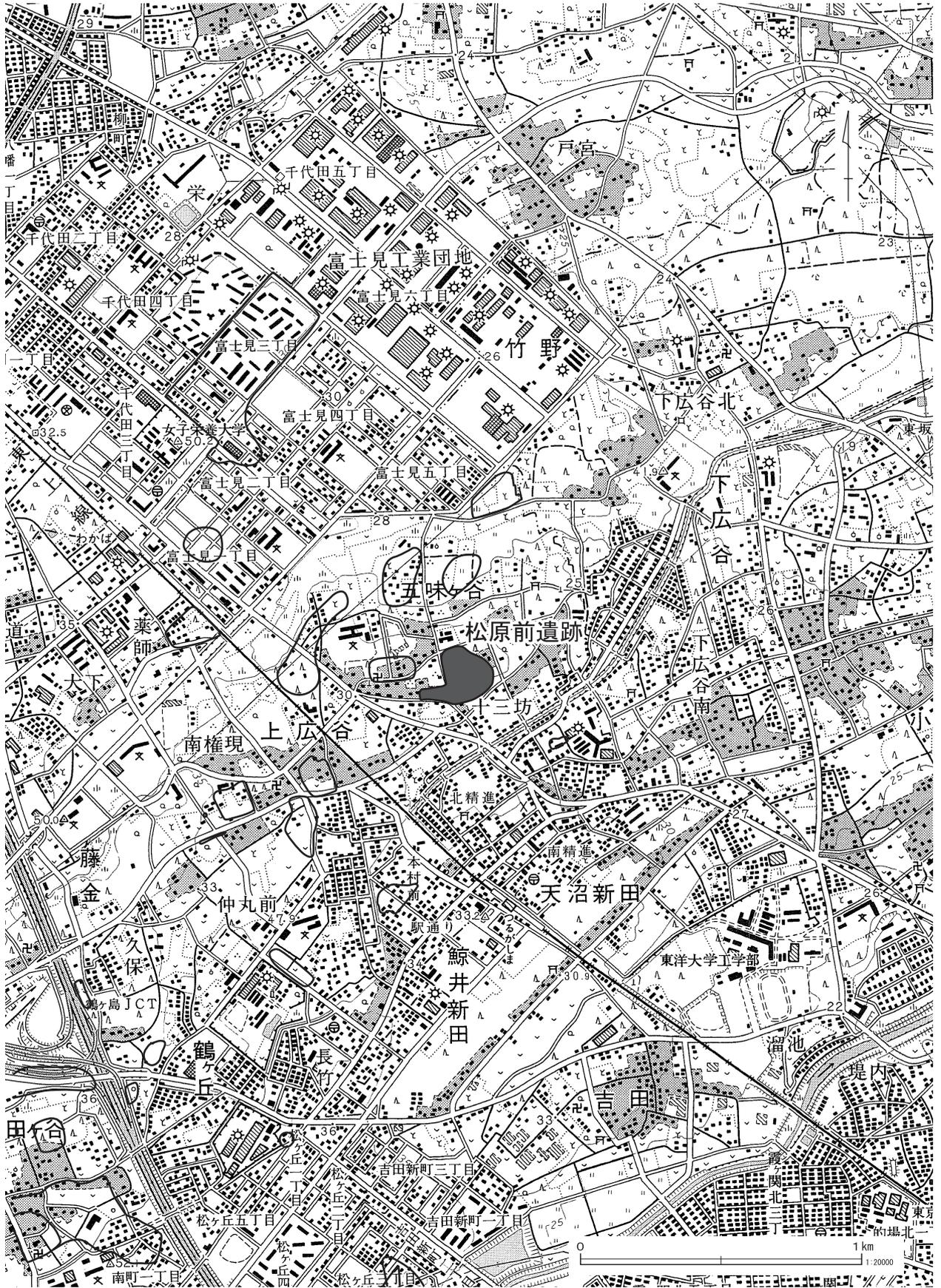
溝跡は、調査区の北側で1条発見された。断面V字形でのしっかりした溝で、台地の傾斜に従ってほぼ南北に16mほど検出されたが、北側の調査区が切れる辺りで東方に屈曲するかのよう状況が認められた。出土遺物より江戸時代中期~後期に比定される。

土壇・ピットは、遺跡南側に集中して検出された。調査区は、南東に向かって緩やかに傾斜しているが、G4グリッド杭付近から谷の堆積土が広がっており、遺構はその黒褐色土を掘り込んで作られている。出土遺物がほとんどなく所属時期の特定は難しいが、遺構の形状や覆土の状況から中・近世に属するものと思われる。

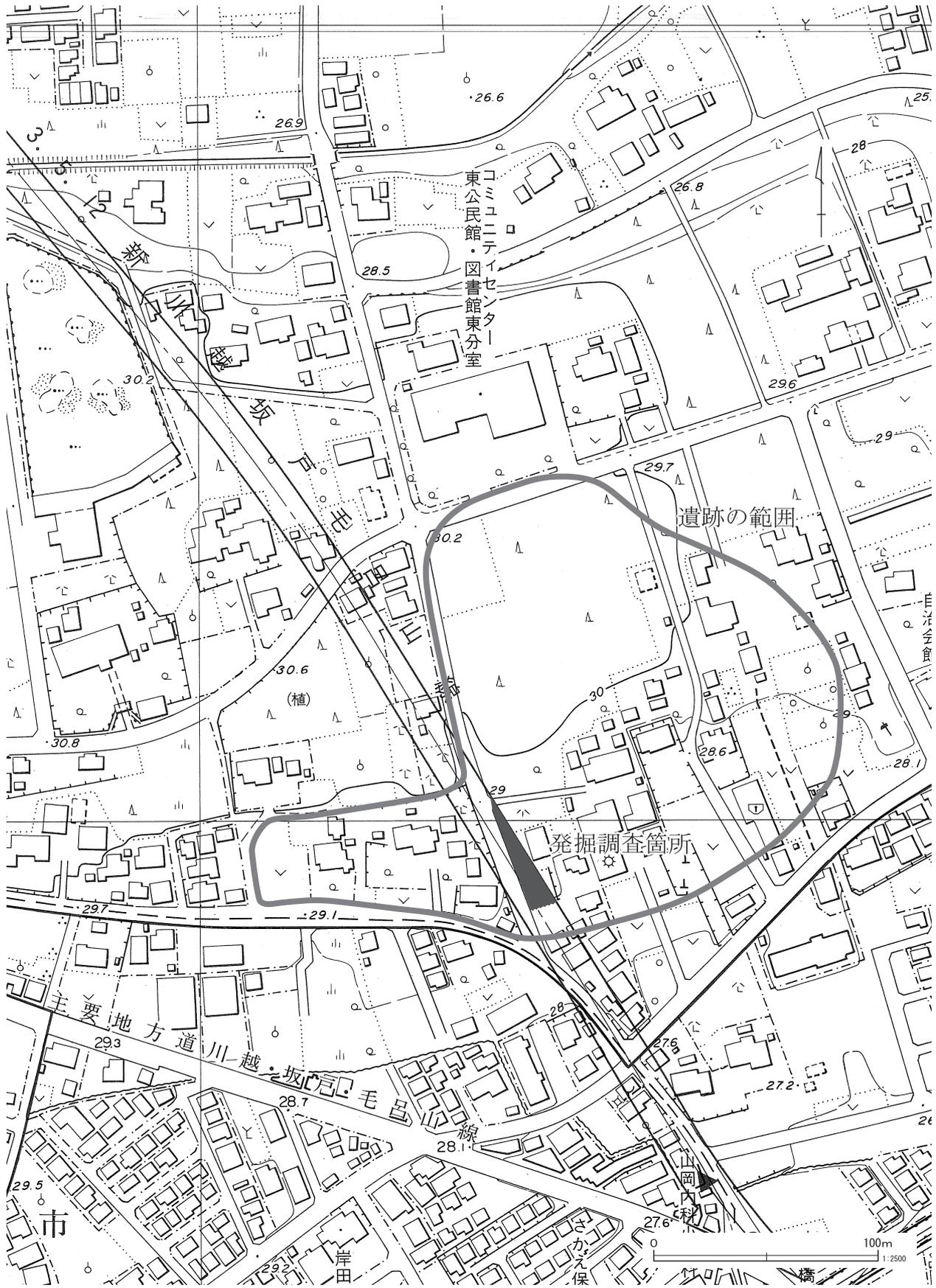
なお、E-3グリッド(TP3)の立川ローム層上部から旧石器時代の剥片が1点出土したため、周囲を拡張して調査したが、石器集中等の遺構は検出されなかった。

以上、狭い範囲のなかで予想以上の遺構が検出されたが、特に縄文時代前期中葉の住居跡は市域でも初出であり、集落の広がりについては今後の調査を待ちたい。

なお、本遺跡の南西約2kmには、関越自動車道と圏央道(首都圏中央連絡自動車道)の交差する鶴ヶ島ジャンクションがあり、そこから北東の川島町に向かう圏央道は、本遺跡の北600mほどのところに建設が進められているが、「遺跡の立地と環境」の項でも述べたとおり、その先、川越市・坂戸市・川島町そして荒川を越えて桶川市と、圏



第3図 遺跡位置図



第4図 調査範囲図

央道新設に伴う発掘調査によって数多くの遺跡が発見されている。特に、隣接する川越市域では、縄文時代前期中葉の住居跡（御新田遺跡）や、中世の城館跡群（宮廻館跡・戸宮前館跡）が調査されており、本遺跡との関連も注目される。

地形と基本土層

前述したように、本調査区は、北北西に頂点を向けた細長い二等辺三角形状をしており、南東に向かって緩やかに傾斜している（第5図）。とはいえ、発掘調査前の写真（図版1上、調査区を南から撮影）を見ても分かるように、台地は比較的平坦で、表面の起伏もさほど大きくなく広がっており、本遺跡の南側から2kmほど先の小畔川に向かって次第に傾斜を強めるようである。

また、古老の話では、戦後の昭和20年代にはまだ雑木林に覆われていたものが次第に畑地として利用され、近年に至って急激に宅地化が進んできたようである。従って、溝跡の検出された調査区北側は雑木林によって保護されてきたが、南半分には、近・現代以降と思われる攪乱が著しく、谷部の堆積土と相俟って遺構の検出も容易ではなかった。

遺跡の基本層序は、地形が東南に向かって傾斜していることもあり、調査区の東壁を用い、部分的に2m×2mの範囲を深く掘り下げて土層堆積を確認した（第6図）。

1層は、いわゆる表土である。畑地としての耕作土が主体となるが、調査区南側では攪乱が著しく、客土と思われる土や、機械による転圧の痕も含まれる。

6～23層が、いわゆる関東ローム層（赤土）に相当すると思われる。但し、後述するように（第8図）調査区北側のTP1では立川ローム層の堆積状況が確認されたのに対し、調査区の南側では明瞭な分層はできず、土質の観察から6～8層が

立川ローム層（IV～X層が混在）、9～14層が武蔵野ローム層に相当するものと判断した。なお、12～14層中には、部分的に鉄分の沈着と思われる硬くガリガリの部分が観察されるが、これは、いわゆる箱根東京パミス（Hk-TP）の可能性も考えられよう。また15～23層は、掘削範囲が狭く深かったため詳細な観察は難しかったが、粘性が極めて強く粘土化も進んでいることから、いわゆる下末吉ローム層に相当するものと考えられる。

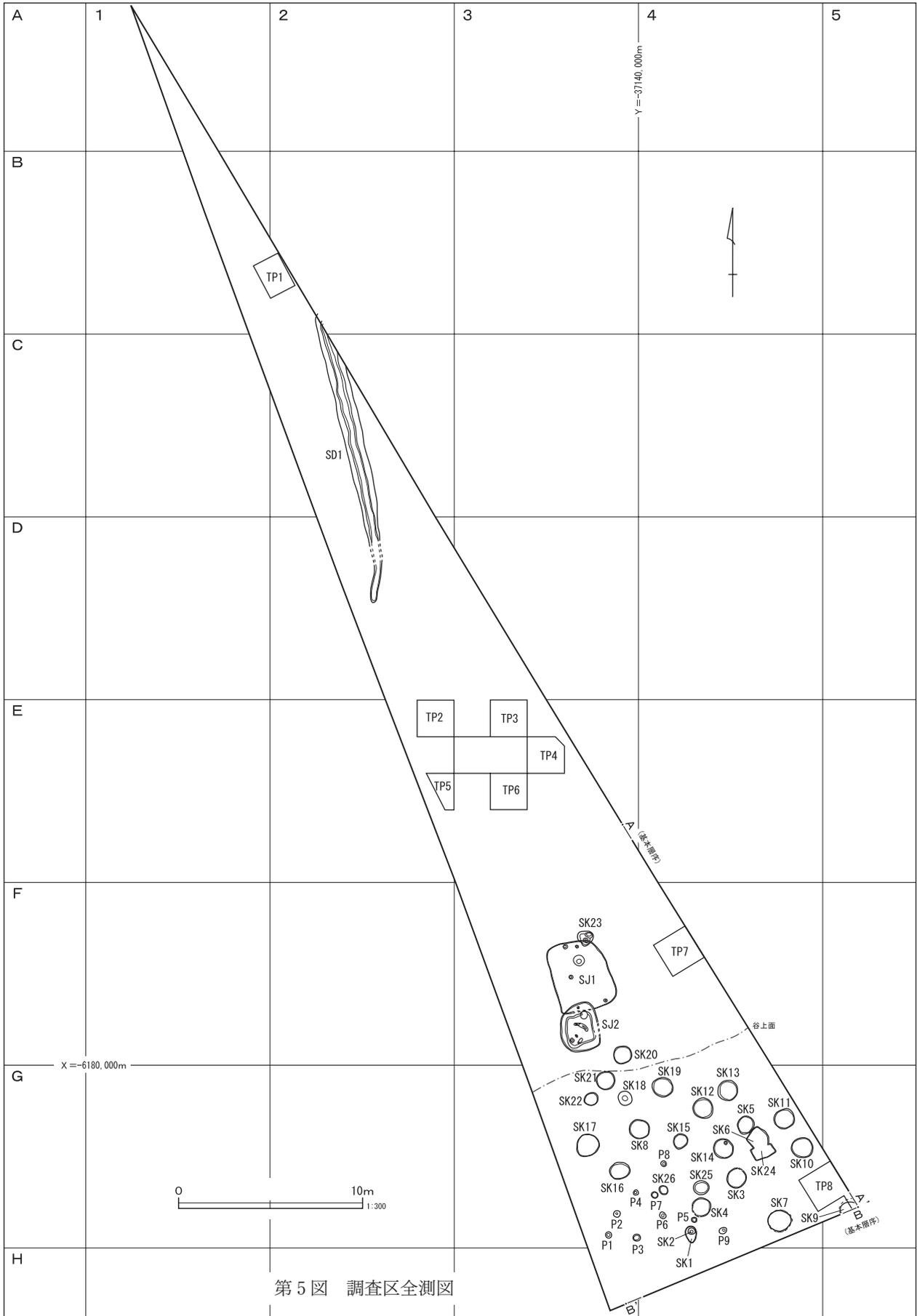
なお、TP1—TP7—TP8を比較すると、武蔵野ローム層及び下末吉ローム層としたものの最上位の標高がほとんど同じであることから、現在見られる南東に向かう緩やかな傾斜地形や調査区南側で顕著な谷地形は、比較的新しい時期に形成されたものであることが解る。

2層は、谷部の最上層にあたり、3層への漸移的な状況が見られる。なお、調査区の東側に寄った部分で本層中から縄文土器片が多数出土したため注意して調査を進めたが、遺構等は検出されなかった。

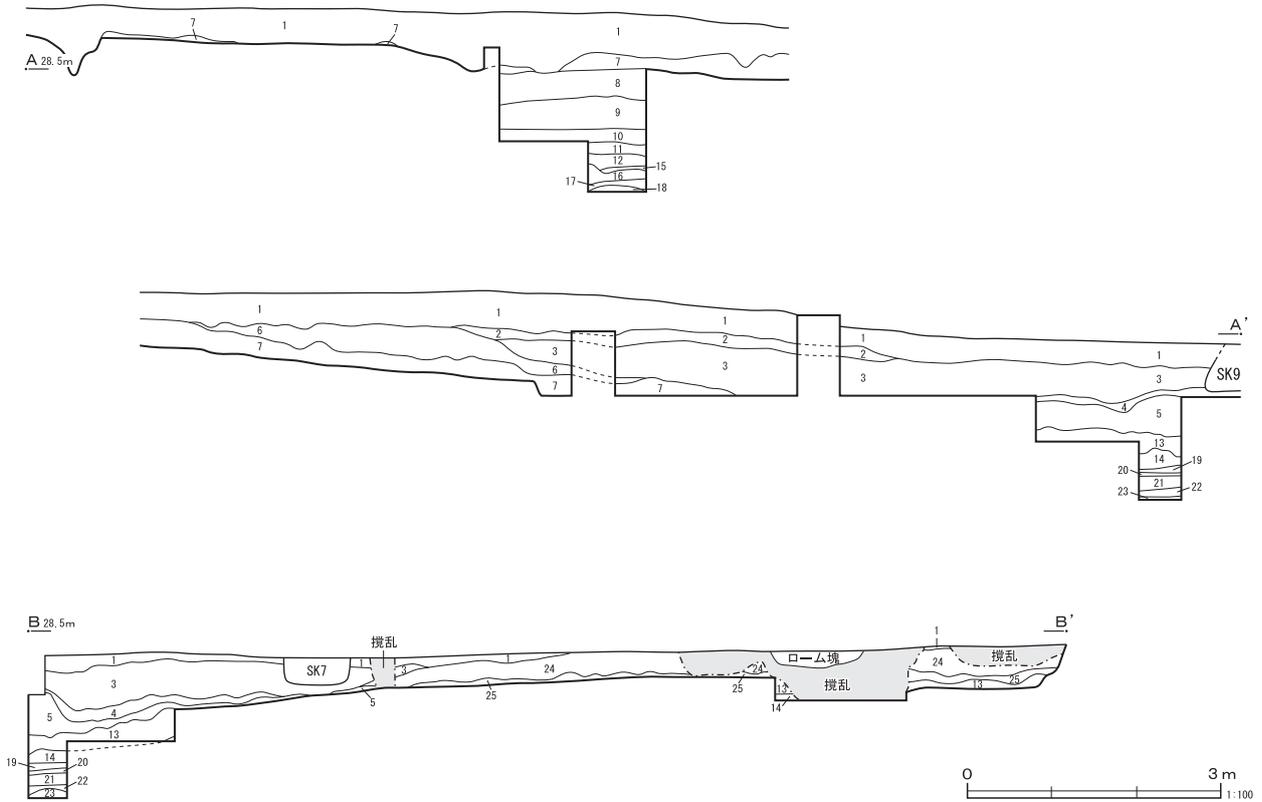
3～5層は、いわゆる谷部の堆積土にあたり、黒褐色～黒色を呈する。発掘調査における遺構確認は、表土（1層）を除去した状態（ローム層上面）で行ったため、調査区南側では黒色土域が明瞭に確認できた。

谷部の土層は、最上面の2層を除けば、やや締まりのある3・4層と非常に均質で軟らかい5層に分かれる。東西方向の土層断面（B-B'）を観察すると、谷部最下層の5層は、調査区東端で大きく凹んだ堆積状況が観察され、南北方向の細い（幅1.5m程度）流路の跡とも考えられる。ただ、何れにしても、両者とも混入物の少ない均質な層で、あまり乱れた堆積状況を示していないことから、比較的短期間に堆積が進んだものと思われる。

なお谷部のライン（2層上面）を全測図に示しておいた（第5図）。



第 5 図 調査区全測図



土層

1	黒褐色土(7.5YR2/2)	表土 基本的に耕作土だが、調査区南側では近世以降の攪乱が著しい。	14	にぶい黄褐色土(10YR6/4)	しまりよく、粘性強い。非常に緻密な層で、斑点状に鉄分の沈着が認められる。
2	暗褐色土(7.5YR3/4)	しまりややわるく、粘性弱い。ロームを不均一に混ざる。基本的には1層と4層の中間な層。縄文土器片含む。	15	黄褐色土(10YR5/6)	しまりよく、粘性非常に強い。灰褐色の粘土をベースに、褐色の鉄分を多量に混ざる。
3	黒褐色土(5YR2/2)	しまりややよく、粘性弱い。ロームは微粒子状に含まれるが、ブロック状にはならない。少量の赤色微粒子含む。	16	にぶい褐色土(7.5YR5/3)	しまりわるく、粘性非常に強い。基本的に灰褐色土と茶褐色土の混土层で肌目は粗い。
4	黒褐色土(5YR2/1)	しまりややよく、粘性やや有。赤色微粒子をごく僅かに含む程度で非常に緻密・均質な層。基本的には3層と5層の漸移的な層。	17	にぶい橙色土(7.5YR6/4)	しまりややわるく、粘性非常に強い。灰褐色土をベースとする不均質な混土层で、緻密でない。炭化物を少量含む。
5	黒色土(5YR1.7/1)	しまりわるく、粘性強い。非常に均質な柔らかい層で、粒子類は含まれない。	18	にぶい赤褐色土(5YR5/3)	しまり極めてよく、粘性強い。鉄分の沈着著しくガリガリの固い層。鉄分の沈着は数cmのブロック状。
6	褐色土(7.5YR4/3)	しまりわるく、粘性弱い。茶褐色土をベースに1~2cm程の小ブロック状のローム(柔らかい)を多量に混ざる。赤色微粒子・炭微粒子が微量含まれる。	19	にぶい黄褐色土(10YR7/2)	しまりややわるく、粘性非常に強い。数cm大のブロック状に鉄分の沈着が認められる。上下層の対比が明らか、灰白色の層に見える。
7	明褐色土(7.5YR5/8)	しまりややわるく、粘性弱い。粒子類は殆ど含まれず均質だが、全体的に緻密でなくフカフカした土。	20	黒褐色土(10YR3/2)	しまりややわるく、粘性強い。数mm大の炭化物を少量含む。
8	にぶい褐色土(7.5YR5/4)	しまりややよく、粘性やや弱い。赤色微粒子を少量含む、又、炭化した植物遺存体も少量含まれる。	21	明黄褐色土(10YR6/6)	しまりよく、粘性やや弱い。色々な土の混土层で不均質。部分的に鉄分の沈着が認められる。
9	明褐色土(7.5YR5/6)	しまりややわるく、粘性やや強い。更に明るい土(7.5YR6/6)を多量に混じる。炭化植物はかなり多い。	22	灰白色土(10YR7/1)	しまりわるく、粘性強い。少量鉄分の沈着が認められるが、比較的均質な層。又、部分的に厚さ2cm程の黒色層を含む。
10	明褐色土(7.5YR5/8)	しまりややわるく、粘性強い。比較的均質・緻密な層で、少量の炭化植物以外は粒子類なし。	23	黄褐色土(10YR5/8)	しまりよく、粘性強い。全体的に鉄分の沈着が認められるが、比較的緻密で均質な層。
11	褐色土(10YR4/6)	しまりややわるく、粘性非常に強い。非常に均質・緻密な層で、粒子類は認められない。	24	暗褐色土(7.5YR3/3)	しまりややよく、粘性弱い。1~2cm程のロームブロックを少量含む。又、赤色微粒子も微量含む。基本的にはD区東壁セクションの6層に相当するものと思われる。
12	褐色土(10YR4/4)	しまり極めてよく、粘性やや強い。沈着した細かい鉄分が多量に含まれ、非常に緻密で固い。	25	褐色土(7.5YR4/4)	しまりわるく、粘性弱い。24層と13層との漸移的な層で、両者がブロック状に混じる。
13	明黄褐色土(10YR6/8)	しまりややよく、粘性強い。5層との漸移的な部分を多く有す。又、部分的に橙色(5YR6/8)でガリガリに固い部分が認められるが、これは滞水による鉄分等に沈着によるものであろう。			

第6図 基本層序

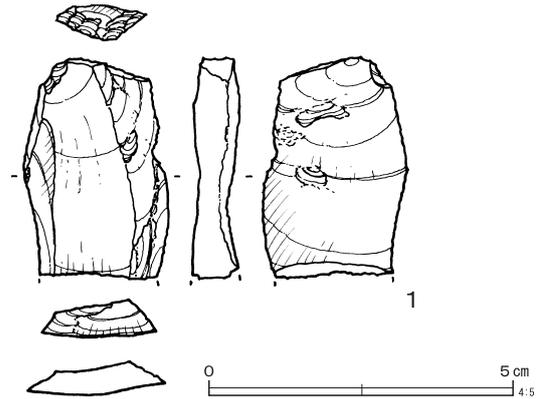
IV 遺構と遺物

1. 旧石器時代

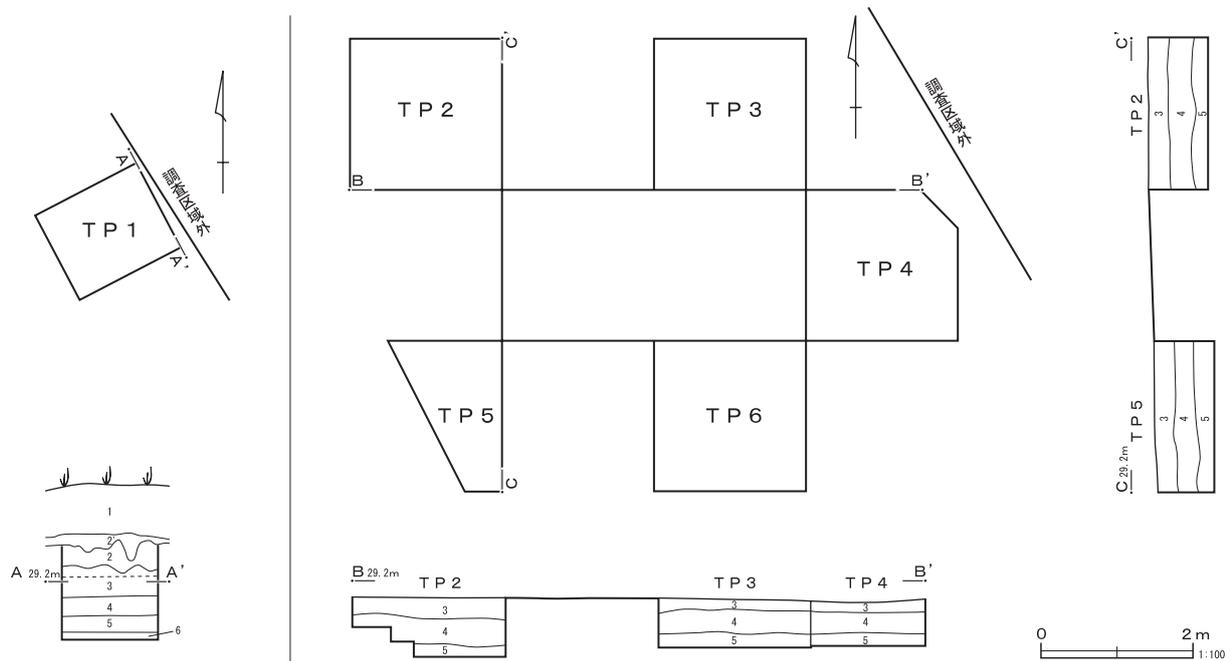
旧石器時代の調査は、TP1～TP6とした旧石器調査区で行った。土層の確認はTP1で行ったが、表土からの土層がほとんど人為的な攪乱を受けずに遺されており、立川ローム層の標準的な堆積が確認できた。各調査区では概ね5層まで掘り下げて調査を行ったが、E3グリッドのTP3の3層中から剥片が1点出土したのみで、他に石器集中等は検出できなかった。

1は縦長剥片である。下半部を正面方向からの力によって欠損するが、打面には入念な打面調整が施されている。外形は両側縁が比較的直線的で、正面の2条の稜線が側縁に並行する。横断面は台形を呈し、正面中央に主要剥離面とほぼ同じ方向からの剥離がみられるが、左右の剥離面は剥離方向が不統一で、連続して縦長剥片が作出されたか

は疑問である。石器石材はチャートが用いられている。長さは現存で3.65cm、幅2.4cm、厚さ0.8cmで、重さは0.77gである。



第7図 旧石器時代の遺物



TP1～6

- 1 暗褐色土(7.5YR3/4)
- 2' にぶい褐色土(7.5YR5/4)
- 2 明褐色土(7.5YR5/6)
- 3 明褐色土(7.5YR5/8)

しまり非常にわるく、粘性なし。表土しまりわるく、粘性やや弱い。基本的には2層をベースにするが植物の影響等により、やや黒味を帯びる。
しまりややわるく、粘性弱い。白色微粒子を少量含む。全体的に緻密でなくフカフカした土で、崩落ロームか。
しまりよく、粘性やや弱い。0.2～0.3mm程の微細な白色粒子を多量に含む。立川ロームIV・V層に対応するが、境は明瞭でない。

- 4 褐色土(7.5YR4/6)
- 5 明褐色土(7.5YR5/6)
- 6 褐色土(7.5YR4/4)

しまり非常によく、粘性やや弱い。0.5～1mm程の赤色微粒子を僅かに含む。立川ロームVII層に相当しよう。
しまり非常によく、粘性弱い。さらに明るい土(7.5YR6/6)を1cm～数cm程のブロック状に混ざる。赤色微粒子もごく僅かに含まれる。立川ロームIX層に相当しよう。
しまりよく、粘性弱い。1mm程の赤色微粒子を少量含む。4層に近いが、しまりややわるく、緻密さにもやや欠ける。立川ロームX層に相当しよう。

第8図 旧石器調査区

2. 縄文時代

(1) 住居跡

第1号住居跡 (第9～14図)

第1号住居跡は、F-3グリッド東よりに検出された。試掘調査時のトレンチ(幅約1.6m)がほぼ中央を南北に縦断しており、当初から住居跡の可能性が指摘されていたが、近世以降と思われる攪乱が著しく、遺構の検出は難しかった。特に、西側の攪乱部分はいくつもの浅い掘り込みが重畳しており、また、遺構確認面での地山は基本土層の8層上面(第6図)であるが、褐色土を基本とする覆土との差が顕著でないため、明確な遺構形状の確認ができず、サブトレンチを併用しながら壁の検出を行った。

平面形は、北東隅がやや内側に入り込んだ形の不整長方形で、規模は長径約4m、短径約3mで、全体的には僅かに南辺が開く台形を呈するようである。また、現状での床面の深さは、0.1～0.2m程であるが、本住居跡と同時期の土器片が多数出土した基本土層の2層下面(第6図)を当時の生活面と考えれば、同8層上面との比高差が50cm程あることから、台地全体の緩やかな傾斜を考慮しても、住居構築当時には数十センチメートルの深さをもっていただものと推定される。主軸方位は、N-20°-Wである。

本住居跡は、北東隅で第23号土壇(SK23)、南側で第2号住居跡(SJ2)と重複関係にあるが、土層断面を確認した結果何れの遺構よりも新しいことが判明した。

土層観察用のベルトは、攪乱等を避けたため変則的な設定となったが、土層は自然な埋没状況を示している。覆土は、比較的締まりの悪い褐色土で、前述のように地山8層との差は明瞭ではなかったが、細かい炭化物や焼土粒子を少量含み、土器片の出土も多かった。

床面は、ほぼ平坦で硬く締まっており、貼り床等は認められなかった。

炉跡は、住居跡北側寄りに検出された。平面形は径60cmほどの円形で、深さ10cmほどの皿状を呈する。覆土は、明瞭な赤褐色土で全体的に焼土粒を含み、またブロック状の焼土塊が顕著だが、それらは5層中に‘浮いた’状態で検出され、炉底等が焼土化している訳でもなく、廃棄後の何らかの攪乱が想定される。

ピットは5本検出された。当初は6本柱穴を想定して床面の精査を行ったが、明瞭な柱穴列は確認できず、わずかに台形に配置されたP1～P4の4本が検出されたが、何れも床面からの掘り込みは15cm程度と浅い。なお、P4は第2号住居跡の床面で検出されたが、位置や覆土からも本住居跡に伴うものと思われる。また、P5としたものは攪乱の下から検出されたが、掘り込みも深く覆土も異なっており、本住居跡に伴わない可能性もある。

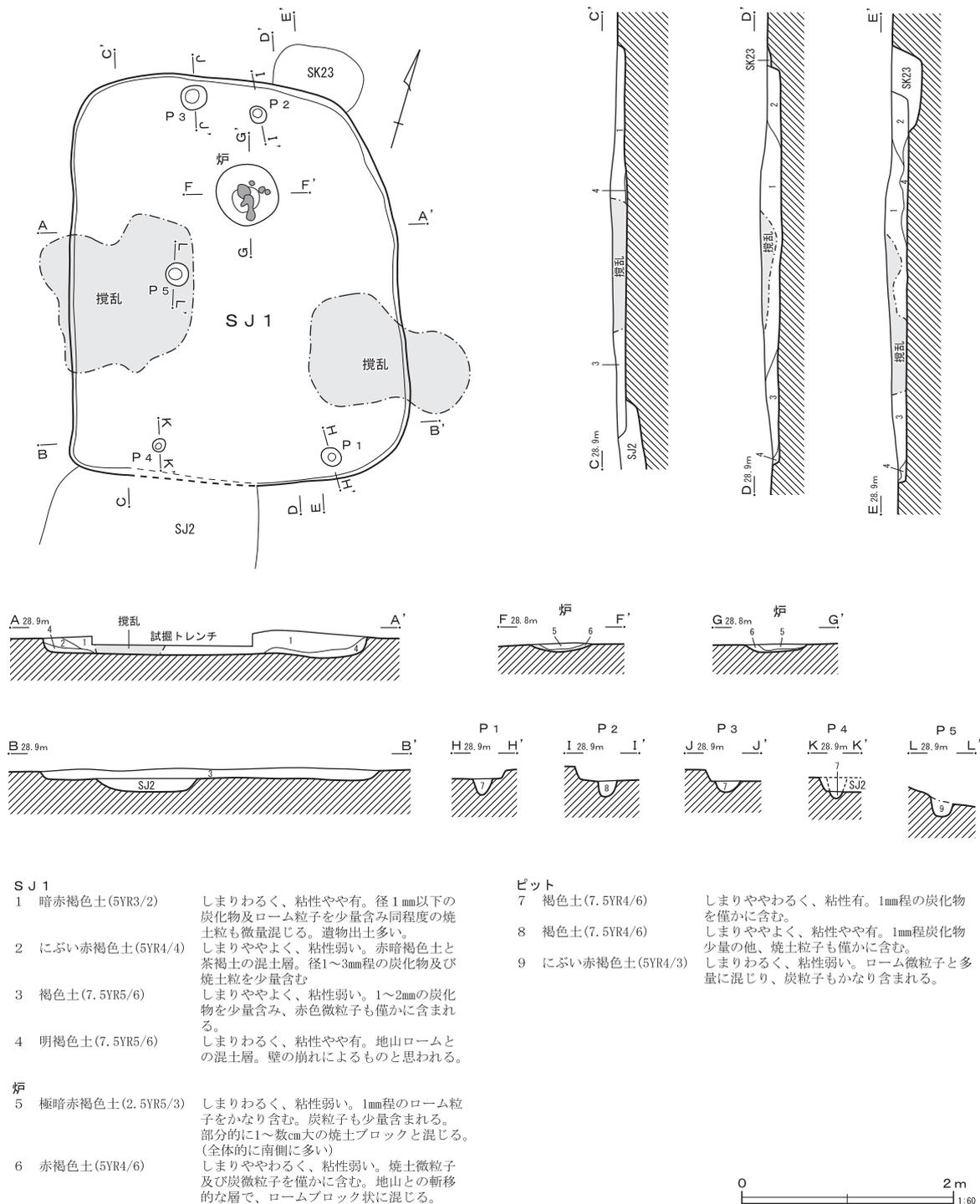
遺物は、コンテナ(40cm×60cm×15cm)に2箱、400点以上出土したが、いわゆる縄文時代前期中葉に属する土器がほとんどで、他時期の遺物の混入はない。

1は、住居跡中央のやや南寄りの床面上でまとまって出土した。口径26cm、高さ28cm(現高)の深鉢形土器で、底部を欠損する。括れた頸部から直線的に開く口縁は4単位の波状となり、全面に横位回転の無節縄文が施文される。原体には1段のRとLの縄が使用され、部分的には波頂下を中心とする菱形のモチーフを意図しているとも思われるが、成功していない。2は、頸部から口縁部にかけての復元個体で、住居跡東側で出土した。

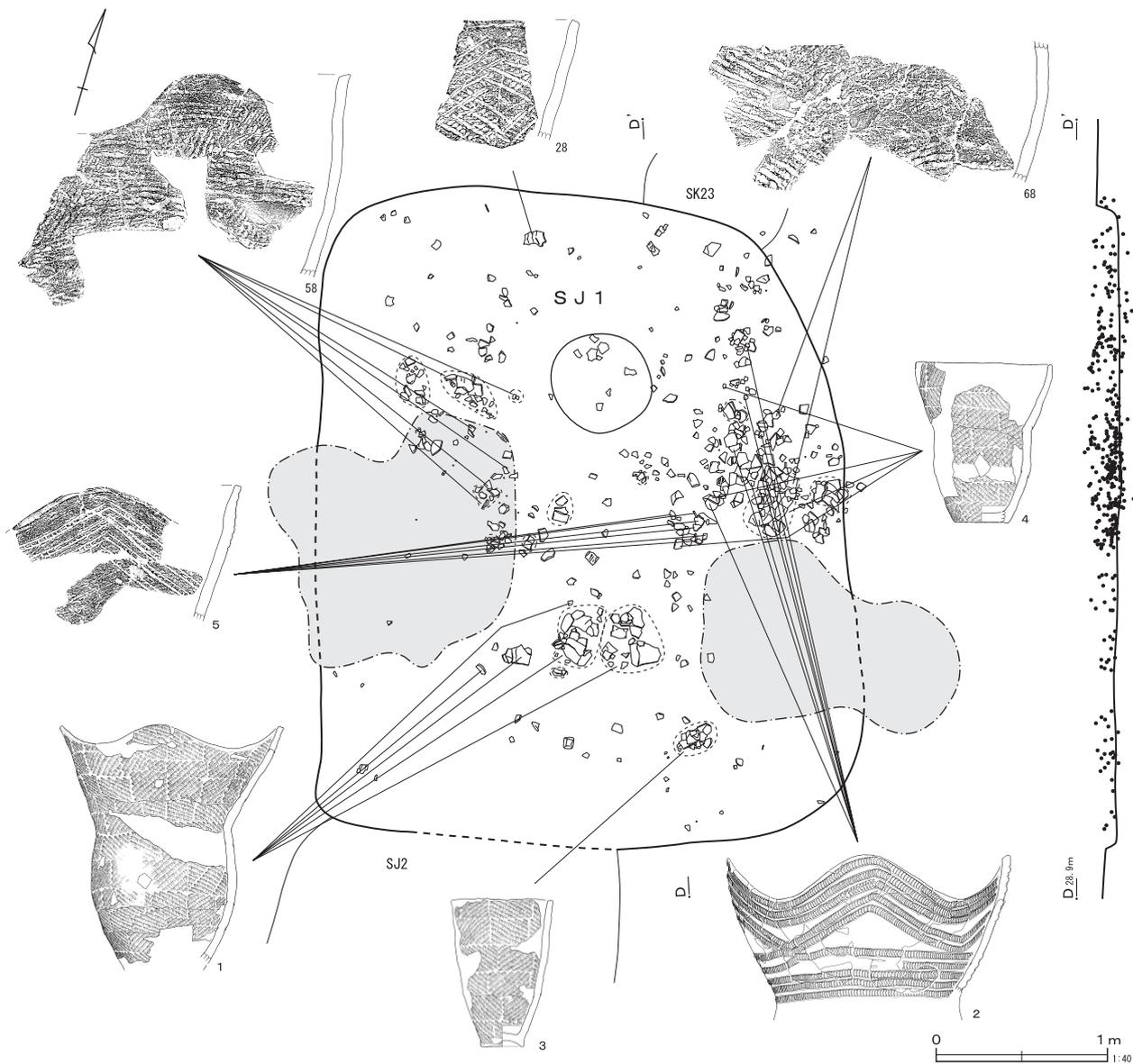
1mほどの範囲の破片が接合しているが、何れも床面直上での出土である。4単位の波状口縁となるもので、口径は約30.5cm、器高18cm(現高)の大型深鉢形土器である。施文は、幅8mmほどの半截竹管状工具の押し引きによる爪形文のみで、口唇に沿って3条の爪形文が巡り、2条単位の爪形

文で波頂下に配された三角形のモチーフが連結して一周する。また、三角形モチーフの下位は3条の爪形文によって区画されている。3は住居跡南東部分にまとまっており、床面から数cm程度浮いた状態で出土した。コップ形の小型深鉢形土器で、

口縁から底部まで残存している。口径12cm、底径5cm、器高12.3cmで、器壁は7~9mm程度である。全面に粗い無節縄文が施されるが、2種類の原体を用いて菱形状の施文効果をあげている。施文は、基本的に左から右への横位回転で、1段のRとL



第9図 第1号住居跡

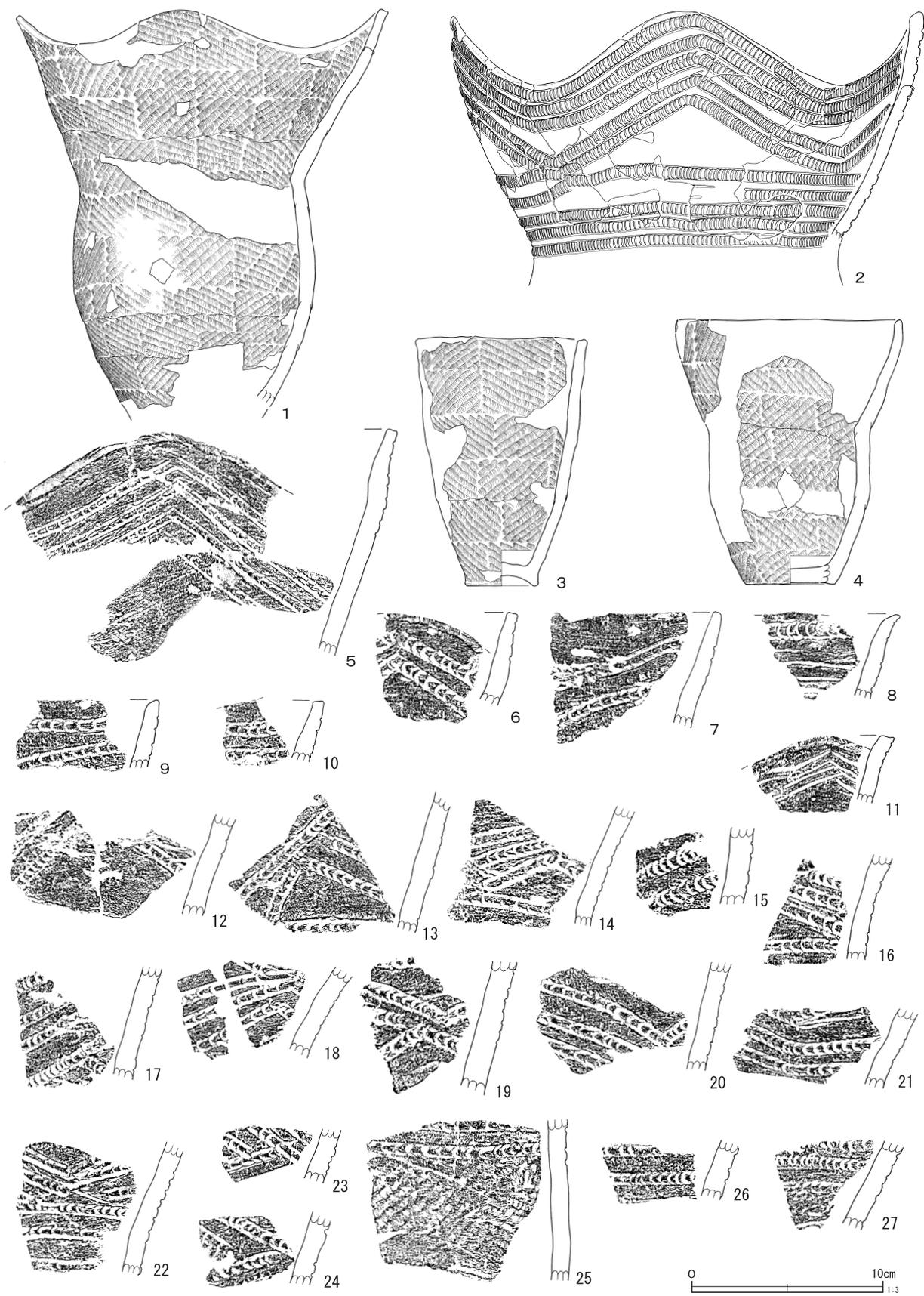


第10図 第1号住居跡遺物出土状況

の2種類の原体を交互に使用し、底部から口縁に向かって何段かに分けて施文しているが、底部付近は圧痕も明瞭でない。なお、底部は上げ底に作られ、周囲は高台状に成形されている。4は、2と同様に住居跡東側で出土した。接合した破片の分布範囲は2と同程度で、何れも床面直上から出土している。胴部上半が僅かにくびれる小型深鉢形土器で、底部から胴部上半まで接合したが、残存率は高くない。推定口径は約15cm、底径6.5cm、推定器高20cm程で、器壁は10~13mm程度である。施文は、無節Rと無節Lの斜縄文を交互に施すこ

とにより羽状の効果を期待したものであるが、3とは異なり、一段ごとに同一原体で全周するようである。底部は、僅かに上げ底に作られている。なお、34としたものが同一個体だとすれば、緩やかな波状口縁となる可能性がある。

5~27は半截竹管状工具の押し引きによる爪形文の施されたもので、5~11は口縁部破片を一括した。5は、1と同様に4単位の緩やかな波状口縁を呈する土器で、角頭状に作られた口唇端は表裏からのナデによって凹状を呈する。爪形文は4条単位で口唇に沿って施文されており、4単位



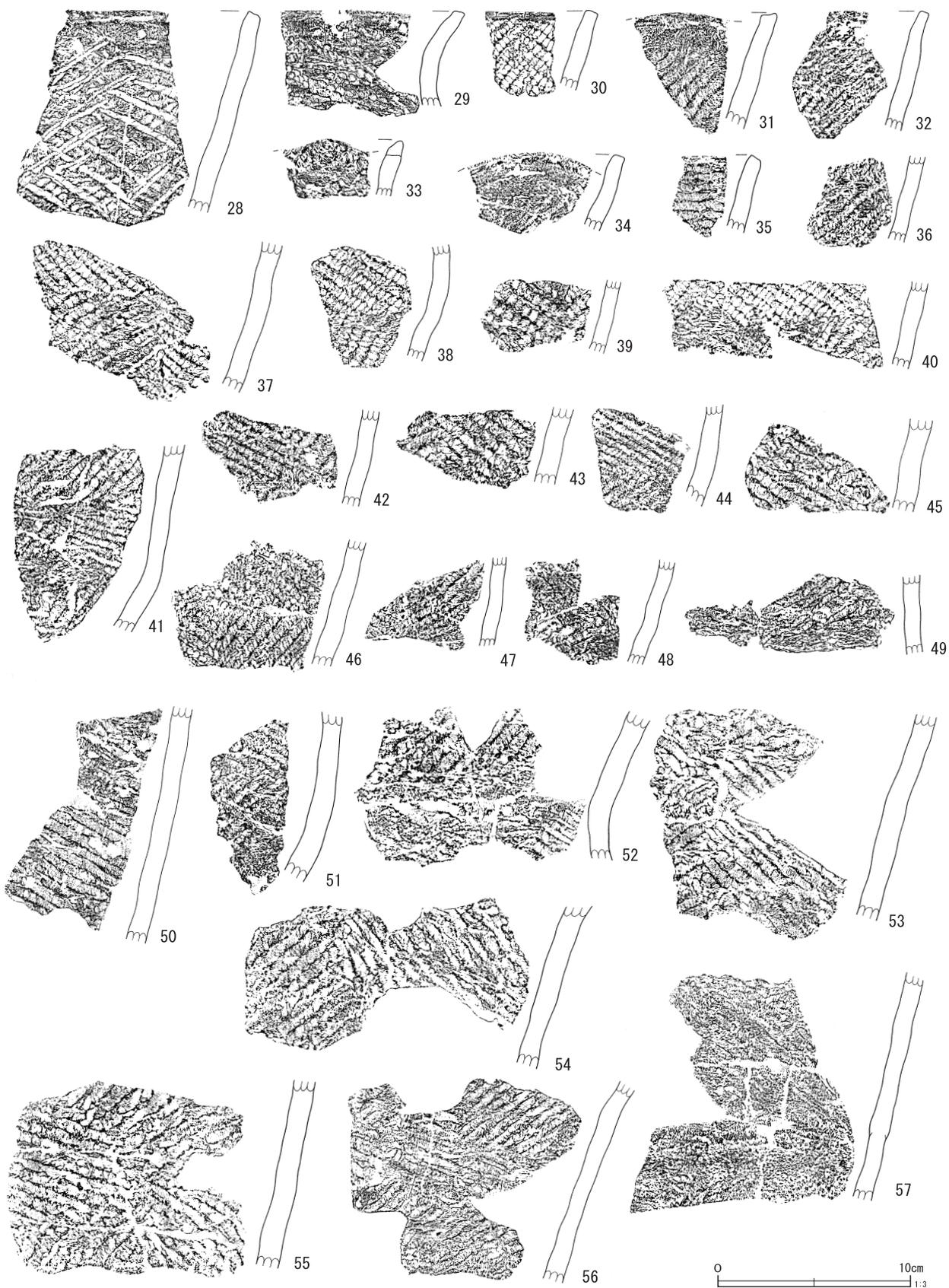
第11图 第1号住居跡出土遺物（1）

の菱形文を描くものと思われる。施文具は幅6mm程の半截竹管状工具で、左から右に強く押し引かれる。表裏とも丁寧にナデられ、特に裏面はきれいに磨かれている。6は、5と同様の波状口縁土器の波頂部である。調整等は極めて近いが、施文具の幅が広く同一個体ではない。7は緩い波状口縁の波底部と思われ、右の波頂部に向かう2条の爪形文の他、左側に口縁に平行する1条も観察される。8は内削ぎ状の口縁部片で、口唇直下に半截竹管状工具による爪形文が1条巡り、その下に同工具による平行沈線が2条施文される。9・10は、波状口土器の波底部の破片と思われ、口唇直下に2条の爪形文が左から右に押し引かれる。9は内削ぎ状、10は角頭状の口唇を呈する。11は、角頭状口縁で、波頂部にあたるが、爪形文ではなく、幅6mm程の半截竹管状工具による平行沈線が2条施される。12・13は同一個体である。12は、2条の爪形文によって描かれる菱形文部分で、破片の下端は、爪形文脇の沈線部分で破損している。13・14・16は頸部下位の破片で、水平に施文された爪形文が文様帯下端を区画する。13では、斜行する爪形文はやや不規則で、整った菱形文ではない。14・16は同一個体である。3条の爪形文で菱形若しくは鋸歯状のモチーフが描かれるが、何れの破片の下端も爪形文脇の沈線部分で欠損しており、水平な爪形文は少なくとも2条存在する。15はやや厚手の破片で、2条の爪形文が斜行する。幅広の施文具を用いており、押し引きの間隔も狭い。17～20・23・24は、菱形のモチーフが交差する部分の破片である。17には押し引きの間隔の短い爪形文が用いられており、右上がりの4条のほか、右下がりの爪形文も3条認められる。18は、焼きのよい堅い土器で、内外面とも丁寧に磨かれている。破片左上が爪形文脇の沈線部分で欠損しており、4条の爪形文でモチーフを描くようである。19は、上2条下1条の爪形文でモチーフを描くもので、最上位の爪形文は口縁に平行に巡るも

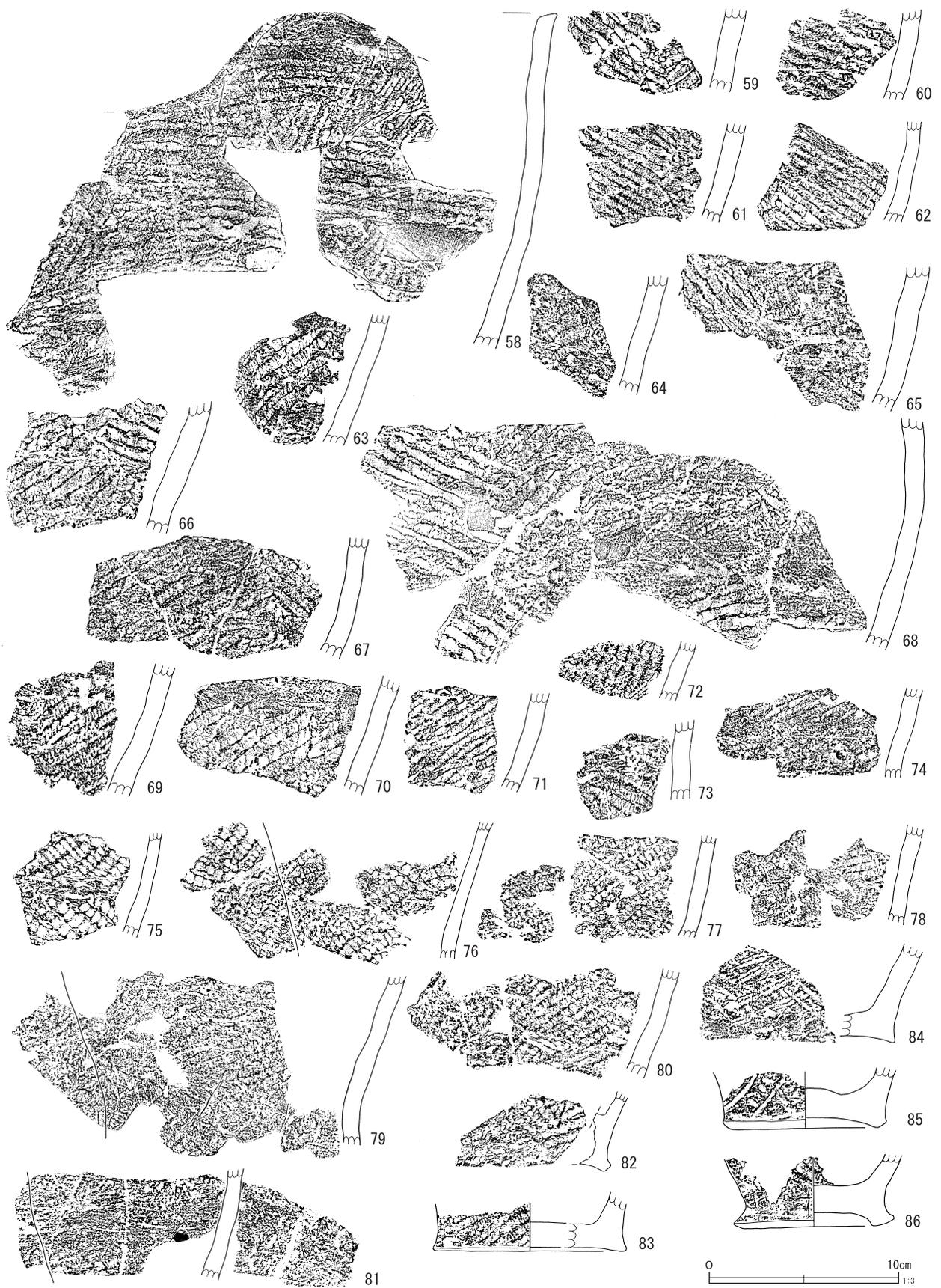
のと思われる。20には、3条の爪形文が鋸歯状に認められる。23・24は、菱形モチーフの交差部の小破片である。21・22は、14などと同様に頸部下位の破片で、文様帯下端を区画する水平方向の爪形文が描かれる。21は、爪形文脇の沈線部分で欠損している下端が水平に巡るもので、他の3条で菱形文を描出するようである。22には、幅狭の施文具で密な押し引きが施される。水平に巡る3条は、やや間隔が空いているが、菱形のモチーフも同じく3条の爪形文で描かれる。25は、頸部直下の破片で、上部に2条の爪形文が横走する。胴部には無節の斜縄文が施され、一部には羽状の施文も見られるが、これは2種類の原体を用いたのではなく、同じ1段Rの原体を用いたものと思われる。なお、施文は爪形文のほうが新しく、縄文は予め地文として施文されたものであろう。26には、横走する爪形文が2条若しくは3条認められ、断面形状から頸部屈曲部の破片と思われる。27には、並行する3条と少し離れて1条の爪形文が認められる。口縁部中位の破片と思われる。

28～86は縄文のみが施されているもので、28～35は口縁部を一括した。

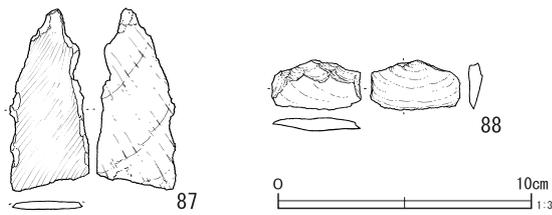
28は、いわゆる直前段合撚の二種類の原体を使って羽状若しくは菱形のモチーフを描くもので、本住居跡では84とした底部破片ともに2点のみ確認された。何れも原体は、1段のRとLの縄をあわせて作ったものであるが、一つは左撚りの2段の縄で、Lは解けて2条のrとなり、土器表面では、Rrrの条が繰り返される。他方は、同じく右撚りの2段の縄であるが、Rは完全には解けておらず、撚りが戻りかけた状態で施文されている。29は緩く外湾する口縁部で、単節RLの縄文が浅く施文される。30は、直線状に開く口縁部破片で、RL及びLRの二種の原体を用いて羽状に施文する。31・33・34は、口唇部に緩やかな湾曲が認められるもので、波状口縁となるものであろう。31は大型土器の波状部で、無節Lの太目の原体で施



第12図 第1号住居跡出土遺物（2）



第13图 第1号住居跡出土遺物(3)



第14図 第1号住居跡出土遺物(4)

文される。33は、比較的小型の土器の波頂部である。口唇は内削ぎで、粗い無節Lの縄文が浅く施される。34は、小型の土器の波状部分である。口唇下1.5cmほどから無節Lの縄文が浅く施されるが、胎土や出土位置などから第11図4の土器と同一個体の可能性がある。32は小型の土器で、浅い無節Lの縄文が横位に二段認められる。35は、口唇直下に無節Rの縄文が横走する。

36～40は、単節縄文が施される。36には単節LRが施文されるが、条間が広い。太さの異なる原体を撚り合わせたものであろうか。37～40は単節RLとLRを用いて羽状若しくは菱形のモチーフを描くものである。37・38は同一個体と思われる。

41～49・51～57・59～62・64～68及び78・79は、何れも胴部破片で、無節RとLの縄文が羽状に施されるものである。41・51は同一個体で、胴下半部の破片である。幅広の条の無節Lと条の細い無節Rが交互に施文される。44はやや薄手の土器で、細い原体が使用されている。46は、比較的小型の土器で、破片左側を中心とする菱形の施文効果が見て取れる。47・48は、同一個体と思われる。薄手の小型土器で、内面は丁寧に磨かれている。45・52～55・60・65・67及び68は同一個体と思われる。1個体に復元できなかったが、住居跡東側の壁際でまとまって出土したもので(第10図)、直径25～30cmほどの大型土器である。無節Rと無節Lの太目の原体が交互に施文されており、菱形の文様効果を意図したものと思われるが、施文方向が一定でないため、必ずしも整った菱形モチーフは描かれていない。施文順序は、基本的に左から右へ施文具を変えながら一周し、全体としては底部

から口縁に向かって施文されているようである。56は、胴部上半の破片と思われる。無節Lと無節Rの横位回転による縄文帯が交互に3帯認められ、菱形の構成はとらないようである。57は、住居跡西側でまとまって出土したもので、胴部下半の破片であろう。施文はきわめて浅く、上半に無節Rの縄文が施され、無文帯において破片下端に無節Lの施文が認められる。65・66は大型の土器で、66は底部直上の破片であろう。78・79は頸部付近の破片で、同一個体とである。径1～2mmの白色粘土を多量に混じた特殊な胎土で、58の土器と同様、炉跡の西側にまとまって出土した。無節Lと無節Rの縄文が交互に数段認められるが、施文はやや雑である。

50・58・63・69～74は、一種類の無節縄文のみが認められるものである。50は比較的大型の土器で、全面に無節Rの縄文が施されている。焼成もよく、内面は丁寧に磨かれる。58は、大型土器の口縁部破片である。波状口縁の波頂部に当たり、施文された縄文を見ると水平方向に長く条が走り、所々異方向の条が見られる。一見すると二種類の縄文の組み合わせのようであるが、使用される原体は1段のRのみのようである。施文はやや雑で規則的でない。63・69～72・74には、無節Lの縄文が施文される。

75～77・80・81は比較的小型の土器である。75～77は同一個体と思われ、単節LRの縄文が全面に施文され、部分的に単節RLが施される。80には無節Lの縄文が施文される。81は底部付近の破片であるが、文様は認められない。

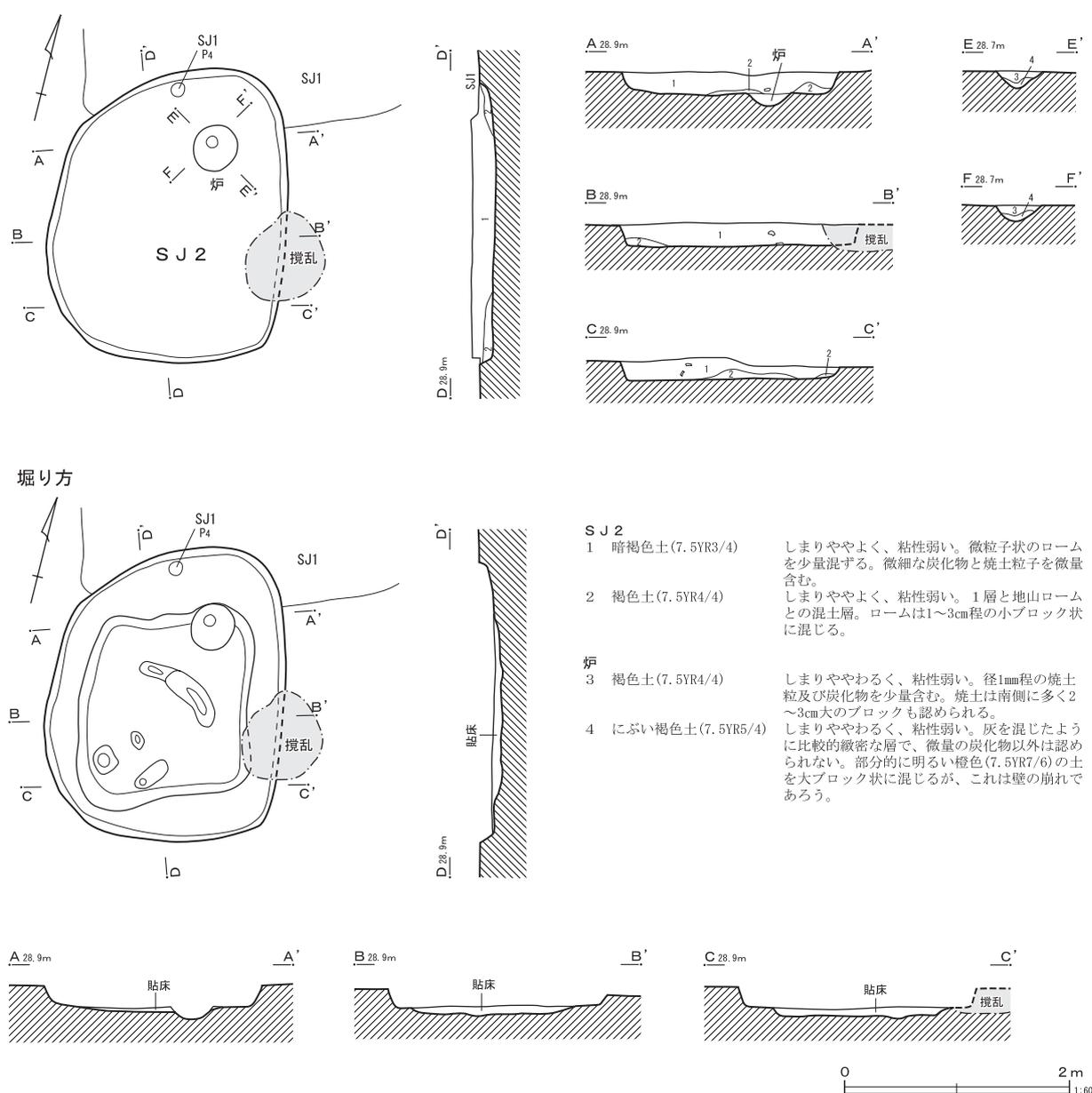
82～86は、底部破片を一括した。底面は、何れも上げ底状になっている。82には、無節Rと無節Lによる羽状縄文、83には無節Lの斜縄文が施される。84には、第12図28と同様に1段のRとLの原体を用いた直前段合撚の縄文が施されている。85は、これとは異なり、1段のRと0段rの原体を撚り合わせた異段の縄である。86には、浅い無

節Rの縄文が認められるが、底面の周囲は高台状に作り出されており、特徴的である。

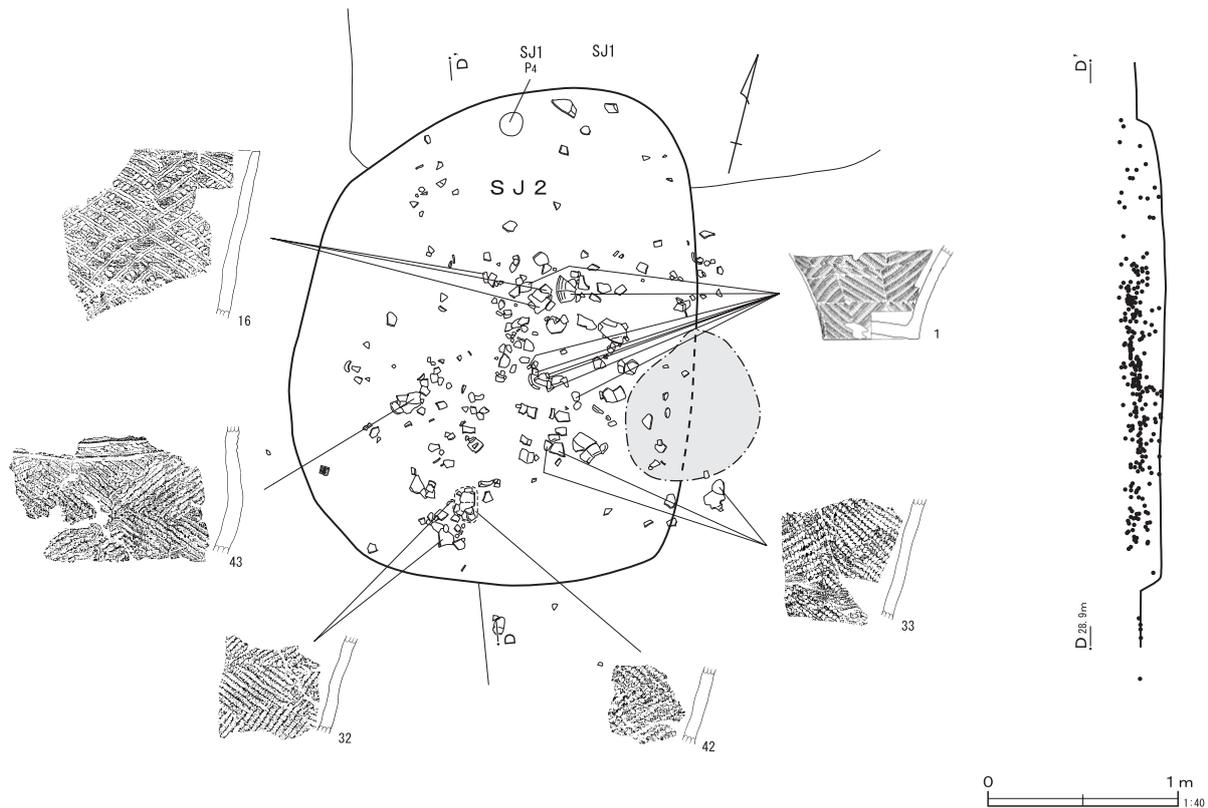
本住居跡から出土した石器は2点である(第14図)。87には正面に研磨を思われる擦痕が観察される。裏面は剥落しており、磨製石斧の一部であった可能性がある。大きさは現存で長さ7.2cm、幅3.1cm、重さは1.26g、石器石材は蛇紋岩と思われる。88は、横長剥片である。表面の風化が進んでおり細部は不明である。大きさは長さ1.95cm、幅3.5cm、重さは0.4gで、石器石材はホルンフェルス製である。

第2号住居跡(第15~18図)

第2号住居跡は、F-3グリッド南寄りに位置し、北側の一部が第1号住居跡と重複している。遺構検出作業での平面観察時には、両住居跡の重複状況はそれほど明瞭でなかったが、土層断面の観察により、第1号住居跡よりも古いことが判明した。また、第1号住居跡と同様に試掘調査時のトレンチが遺構の東側三分の二ほどを南北に縦断している。試掘トレンチからの出土遺物も多く、当初から遺構の存在の可能性が指摘されていた



第15図 第2号住居跡



第16図 第2号住居跡遺物出土状況

が、東側部分には、近世以降に作られたと思われる浅い土壌状の掘り込みが重畳しているため壁の残存率が低く、遺構形状の確認も難しかった。また、遺構確認面での地山は、基本土層の7層若しくは8層とした黄褐色のローム層であるが、谷部に近いのか黒褐色土を混じており、暗褐色土を基本とする覆土との差は極めて少なかった。

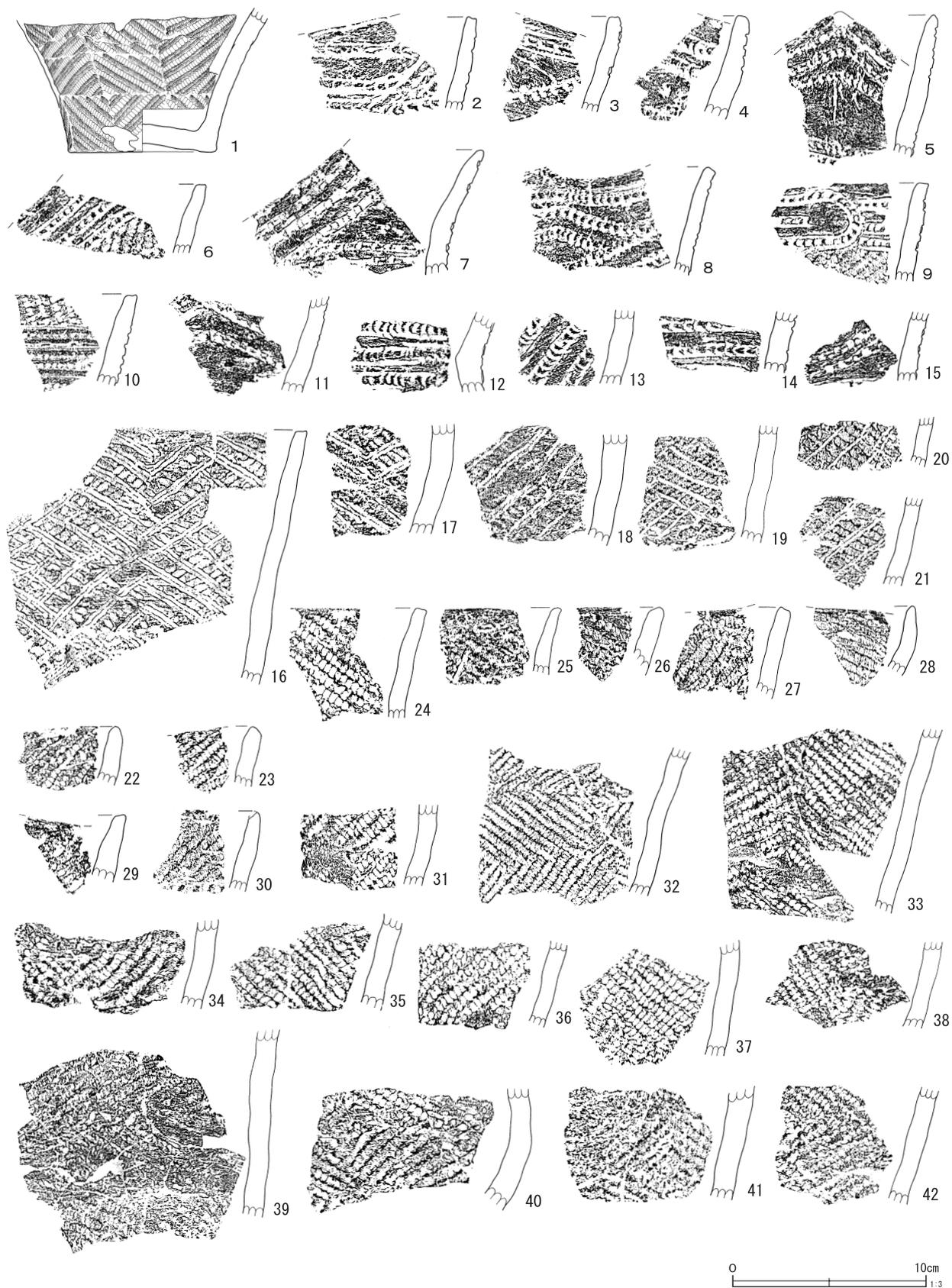
平面形は、東側がやや直線的な不整楕円形を呈し、規模は長径約2.6m、短径約2mである。また、現状での床面の深さは20cmほどであるが、第1号住居跡と同様に基本土層2層下面と遺構確認面との比高差を考慮すれば、住居構築当時には数十センチメートルの深さをもっていたものと思われる。主軸方位は、N-10°-Wである。

土層観察用のベルトは、第1号住居跡と共通のD-D'及び直行するB-B'を基本に設定したが、攪乱が多く、また平面での遺構形状の検出が難しかったため更にA-A'・C-C'の2本を設定し

た。覆土は1層とした暗褐色土層を基本とするが、焼土をはじめとする粒子類の混入は少なく、地山（基本土層8層）との差は少なかった。従って、特に壁の検出は難しく、土層断面を確認しながら慎重に検出を行った。

床面は、比較的固く締まっており、検出はさほど難しくなかったが、床面を清掃したところ、遺構中央部分に貼り床を検出した。周辺の床及び壁部分が基本土層8層としたローム土を基本とするのに対し、貼り床部分は黒褐色土を混じたローム土で明瞭に確認できた。床下の掘り込みは数cmから10cm程度で、一辺1.5mほどの方形に掘り込まれており、下面は凹凸が著しい。

炉跡は、北東寄りに検出された。位置的には、前述の貼り床範囲の末端にかかっており、床面を構築した後で作られたものである。平面形は長径45cm、短径40cmほどの不整楕円形で、深さは15cmほどのすり鉢状を呈している。3層とした褐色土



第17图 第2号住居跡出土遺物(1)

を覆土とし、第1号住居跡ほど明瞭な炉跡ではなかったが、僅かながらも焼土・炭化物等の混入が認められ、また掘り込みも確認できた。なお、炉跡中央で一段深くなる2層部分は、緻密な褐色土が充填されており、炉に蓄積された灰などに起因するものかもしれない。

ピットの類は検出されなかった。床上はもとより、遺構の周囲も精査したが、柱穴らしい掘り込みは検出できなかった。唯一、住居跡北壁際でピットが1基検出されたが、位置・形状・覆土から第1号住居跡に属するものと判断した(SJ-1 P4)。

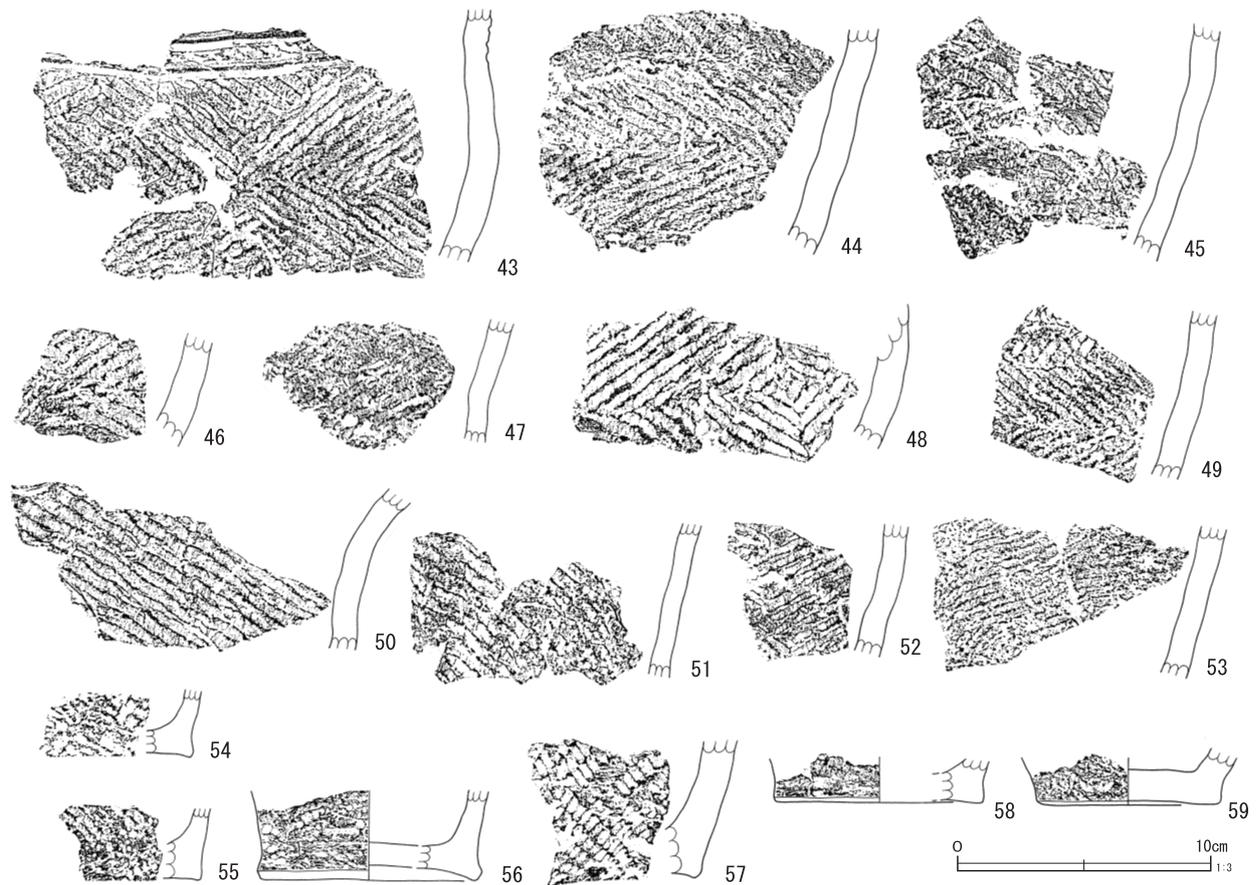
遺物は、コンテナ(40cm×60cm×15cm)に2箱、300点近く出土したが、いわゆる縄文時代前期中葉に属する土器がほとんどで、他時期の遺物の混入はない。但し、遺物の分布状況を見ると、ブロック状にまとまった出土状況は少なく、小破片が遺構全体に散在している。また、遺物の垂直分布図にも明らかなように、ほとんどの遺物が1層上位から出土しており、床面直上からの出土遺物は少ない(第16図)。従って、第1号住居跡とは異なり、出土遺物のほとんどは本遺構に直接伴うものではなく、住居廃絶後の廃棄等によるものと思われる。

2～9・11～15は、半截竹管状工具の押し引きによる爪形文の施されたもので、2～9は口縁部破片を一括した。2は、波状口縁の土器で、口唇直下の1条と少し離れてそれに並行する2条の爪形文のほか、モチーフを描くと思われる2条が斜行している。3も波状口縁になるものであるが、施文は半截竹管状工具による押し引きではない。口唇に沿った2条の沈線は半截竹管状工具によるものと思われるが、その内部の押し引きは、先端が二股の工具によるものと思われ、同様の工具による斜位の施文も見られる。4も波状口縁となるものと思われ、口唇に沿って2条の爪形文が施される。5は、波頂部の破片である。爪形文は、口唇に沿った3条と、破片下部に2条認められる。幅の狭い(4mmほど)工具を用い、器面に垂直に

近い角度で施文しているようである。6も波状口縁になるものと思われ、口唇に沿って3条の爪形文が巡るが、爪形文間には浅く縄文の地文が施されている。単節LRの横位施文と思われるが、節間が細いことから、あるいは0段多条の原体かもしれない。7は波頂下付近の破片で、爪形文は口唇に沿う3条と、水平に2条認められる。幅4mmほどの細い原体が、器面に垂直に近い角度で使用されている。8は、口唇上に波頂間の小突起をもつものである。口唇直下に爪形文が1条めぐり、その下位の曲線的な2条と、破片右下の2条でモチーフを描くものと思われる。9は、口唇端が僅かに反っていることから、波状口縁土器の波底部と思われる。爪形文は、基本的に口唇に沿って3条が巡るものようであるが、破片部分で横U字状に閉じられている。また、爪形文の下部には単節LRの縄文が施文されている。11・15は同一個体と思われる。鋸歯状若しくは菱形に爪形文が巡るものであるが、施文は押し引きによる爪形文ではなく、幅4mmほどの細い半截竹管状工具を用いて引いた条線の上に同じ工具で刺突を行っている。12・14は、頸部付近で、幅広の爪形文が3条横走する。特に12は屈曲部の破片で、爪形文は密に施文される。13は、他とは異なり赤褐色を呈し、焼成もよい。幅広の爪形文が3条斜走する。

10は、口唇部直下に、櫛歯状工具によるやや斜位の列点状刺突文が連続して行われるもので、波状口縁となるかもしれない。また、刺突文の下位には、幅6mmほどの半截竹管状工具による平行沈線が数条密に施され、そのうち4条の沈線内にも同様の列点状刺突が施されている。

1・16～18・21は、いわゆる直前段合燃の縄文が施されるものである。1は、大型土器の底部で、本住居跡で唯一復元できたものである。全面に2種類の原体による縄文が施され、菱形のモチーフを描出している。左燃りの原体は、1段のRとLを燃り合わせたいわゆる直前段合燃の縄で、Lが



第18図 第2号住居跡出土遺物(2)

解けて r となり、Rrrの条が繰り返される。右捻りの原体は、一見すると捻りの異なる直前段合捻の原体のようであるが、1段の条と、0段の条が交互に施文されていることから、第1号住居跡の例(第12図28)とは異なり、1段のLと0段の1を捻り合わせた異段の縄と思われる。16・17は、2種類の原体を用いて、菱形のモチーフを描出している。何れも1段のRとLの原体を捻り合わせるもので、左捻りのものはLが解けて2条のrとなり、右捻りのものはRが解けて2条の1となっている。18・21は胴部破片で、上記と同様の左捻りの縄文のみが施される。

19・20は、一見したところ上記と同様に直前段合捻の原体によるものと思われるが、1段の条と、0段の条が交互に施文されていることから、1段と0段の原体を捻り合わせた異段の縄であろう。すなわち、19の上半は1段Lと0段1を捻り合わ

せたもので、19の下半と20は1段Rと0段rを用いた異段の縄である。

22～59は、単節縄文及び無節縄文が施されるもので、22～30は口縁部を一括した。

22～24・26には単節縄文が施され、22・23は単節LR、24・26は単節RLである。何れも口唇部直下から施文されている。なお、24は角頭状の口唇をもつ暗赤褐色の土器で、施文も深く焼成もよい。25・27～30には、口唇部直下から無節縄文が施文される。25・28には無節Rが、27・29・30には無節Lの縄文が認められる。28は、やや内湾気味の器形で、29はあるいは波状口縁となるものかもしれない。

31～42は、単節縄文が施されるものである。

31は比較的小型の土器と思われ、単節LRの斜縄文が施文される。

32～42は、何れも2種類の原体が用いられ、羽状若しくは菱形の文様効果を意図したものであ

る。32は、薄手の頸部付近の破片で、0段多条の縄文が全面に施文される。左撚りと右撚りの原体を、上から下へ幅3cmほどで交互に施文する。33も胴部上半の破片と思われ、焼成もよく、内面も丁寧に磨かれている。施文は、RLの斜縄文が主体的で、菱形等の文様効果は明瞭でない。34～38・41・42は胴部破片で、単節RLとLRの縄文が羽状に施されている。39は厚手の胴部下半の破片で、上部にLR、下部にLRの単節縄文が横位に浅く施文されるが、何れも0段多条の原体と思われる。40は胴部上半の破片で、羽状の縄文が認められるが、原体は2段のRLと1段のLの組み合わせによるものである。

43～53は、無節の縄文が横位に施される。

43～49・52には2種類の原体が用いられ、羽状若しくは菱形の文様効果を意図したものである。

43は胴部上半の破片と思われ、無節Rと無節Lの縄文が菱形に施文されている。また、破片上部には、縄文施文後に半截竹管状工具によって2条の沈線が水平に引かれており、頸部との境を明瞭に区画しているものと思われる。44の上端部分には薄く粘土が被っており、輪積み成形の接合部分と思われる。縄文は、無節Rと無節Lの二種類の縄文が横位に二段施されている。45は、胴下半部の破片と思われる。無節Rと無節Lの縄文が用い

られているが、施文は浅く不明瞭で、施文方向も規則的でない。46～49は、何れも胴部破片で、無節Rと無節Lの縄文が用いられており、鋸歯状もしくは菱形のモチーフを意図したものと思われる。52は表面黒色の土器で、焼成も比較的よい。施文は、無節Lと無節Rの縄文が施されるが、施文は浅く、条間は開いている。

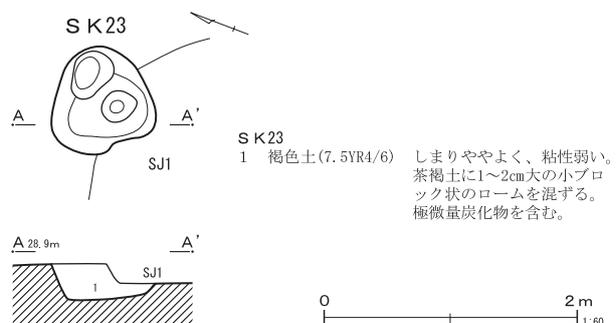
50・51・53は、無節の斜縄文のみが認められるものである。50は、頸部付近の破片と思われ、無節Rの斜縄文のみが全面に施される。51は小型土器の胴部破片で、焼成はよく、内面は丁寧に磨かれている。施文は、無節Rの斜縄文が全面に浅く施される。53も小型土器の胴部破片である。横位に施文された無節Lの斜縄文が全面に施される。

54～59は、底部破片を一括した。54と55は小破片であり、器面の風化も著しいため明瞭ではないが、一部に無節Lと思われる縄文が認められる。56は底径8cmほどの土器で、明瞭な上げ底状を呈しており、底面の周囲は指頭で摘むように整形されている。施文は、単節RL及び単節LRの斜縄文が認められる。57は大型土器の底部である。単節LRとRLの縄文が上下に二段認められる。58は、底径8cmほどの土器で、上部の残存率は低く、施文は不明瞭である。59は、底径7cmほどの土器である。無節Rらしき縄文が微かに見て取れる。

(2) 土壙

第23号土壙 (第19図)

第23号土壙は、E-3グリッド北東寄りに位置し、第1号住居跡と北隅コーナー部分で重複する。径0.8mほどの不整円形を呈し、深さは25cmほどで底面は比較的平らに作られている。出土遺物はなく時期は特定できないが、形状は他の土壙や近世の掘り込み等とは明らかに異なり、埋土は住居跡覆土に近く、また第1号住居跡に切られている点などから、縄文時代の遺構の可能性が高いと判断される。



第19図 第23号土壙

(3) グリッド出土遺物 (第20図)

遺構外から出土した遺物を一括する。縄文時代早期後葉の32以外は、住居跡と同様、縄文時代前期中葉に属するものである。

1～10は、半截竹管状工具の押し引きによる爪形文が施されるものである。1～5は口縁部破片で、何れも波状口縁を呈するようである。1は、薄手の土器で焼成もよく、内外面とも丁寧に磨かれる。口唇に沿って3条の爪形文が巡る。2～4には、口唇に沿った2条の爪形文が認められる。2は破片下部に斜行する1条が認められるが、器面の風化が著しく明瞭ではない。5も波状口縁を有する土器と思われるが、4条の爪形文は口唇に平行せず、口唇下に無文帯を生じている。6は、大型土器の頸部付近と思われ、3条の爪形文が横走し、その下位に無節Rと無節Lによる羽状の縄文が認められる。7の下端には、横走する爪形文の側縁部分で破損した形跡があることから、頸部直上の破片と思われる。平衡する7条の爪形文が斜走する。9には斜交する爪形文が集中しており、菱形文等の交差する部分であろう。

11は、焼成のよい薄手の土器で、幅9mmほどの半截竹管状工具による平行沈線によってモチーフをえがくものである。

12・13は、いわゆる直前段合撚の縄文が全面に施されるもので、12は口縁部破片である。何れも1段のRとLの縄を使用し、右撚りと左撚りの二種類の原体によって羽状の施文効果を求めたものである。

14～16は、いわゆる異段の縄文の施されるものである。14は1段Rと0段rを撚り合わせた異段の縄が全面に施文される。15・16は、基本的に上記のLRrの縄と、1段Lと0段lを使用したRLlの2種類の原体を用いて羽状の施文効果を意図したものであるが、何れも1段の縄の節間が詰まっていることから、0段多条の原体を用いたものと思われる。

17・18は、調査区南東隅のTP8の3層上部(第6図)から出土している。17は口縁部破片で、口唇下に添付隆帯による文様帯が巡るものである。隆帯は、器面から8mmほど摘み上げられた三角形を呈し、平行する2本の隆帯間に環状のモチーフが配される。また、隆帯添付後に単節縄文が施文されているが、原体は0段多条のLRのようで、同じ原体で口唇外面も飾られる。18は、胴部上半の破片と思われ、上端に半截竹管状工具による沈線が横走し、単節RLと単節LRが上下に段に施されている。但し、節間が密接なことから、0段多条の原体が用いられているようである。

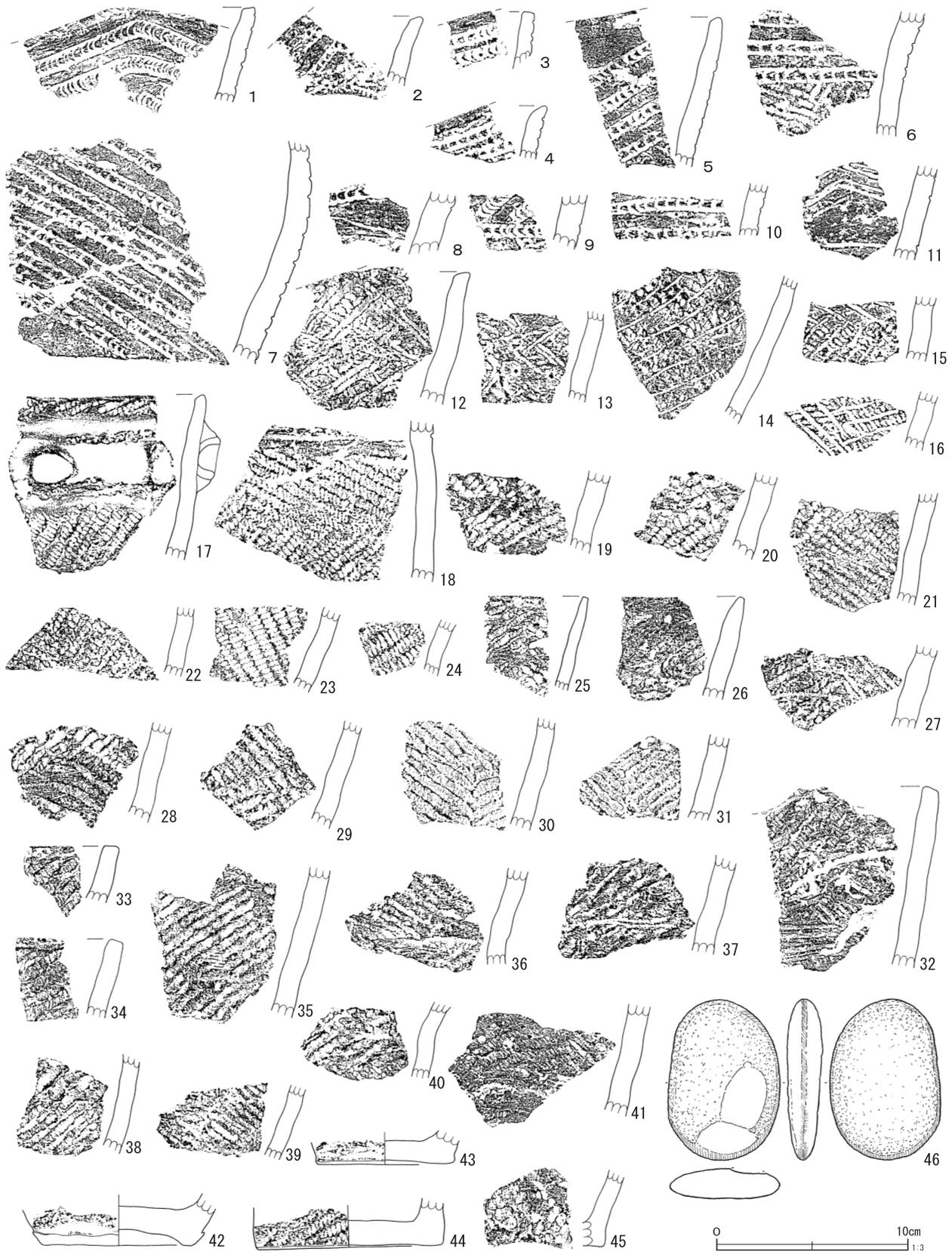
19～24は、単節縄文が施されるものである。19～22は、単節LR及び単節RLの二種類の原体が用いられている。23・24は、何れも単節LRの縄文のみが施されているが、これらも節間が密接なことから、0段多条の原体と思われる。また、23は縦位施文である。

25～31・33～41は、無節縄文のみが施文されるもので、25・26は口縁部破片である。25は、非常に薄手の土器で焼成もよく、無節Lと無節Rの縄文が横位に認められる。26は大型土器で、無節Lの縄文が浅く施文される。27～31・39・41は胴部破片で、無節LとRの二種類の原体が用いられているものである。33・34は同一個体で、幅広の無節Lの縄文が全面に施文される。

32はいわゆる条痕文系土器で、口縁部に突起を有する。下半と裏面に条痕文が施され、上半には無節Lの縄文が粗く施文されている。

42～45は、底部破片を一括した。45は器面が粗く明瞭ではないが、単節LRの縄文であろう。

46は、17・18と同様にTP8の3層上部から出土した。扁平楕円礫の下縁及び側縁に、使用によると思われる磨痕が見られるもので、磨石又は敲石であろう。長さ8.4cm、幅5.8cm、厚さ1.9cmで、重さは13.71gである。石材は片岩である。



第20図 グリッド出土遺物

3. 中・近世

(1) 溝跡

第1号溝跡 (第21図)

第1号溝跡は、調査区北側に位置し、C-2からD-2グリッドにかけて検出された。出土遺物から、江戸時代中期～後期に比定される。

発掘調査前の現況は、調査区南側が畑地もしくは宅地であったのに対し、本遺構付近は雑木林として残されていたようで、表土も柔らかい黒色土で、近世以降の攪乱もほとんど見られない。但し、セクションD-D'の南側はコンクリート基礎によって分断されており、建物用地として削平されている。地形は北から南に向かって緩く傾斜しており、A-A'とD-D'付近の確認面での比高差は35cmほどである。

遺構は残りが良く、上幅1mほどで、ほぼ南北に検出された(N-15°-W)。溝底は25cm～30cmほ

どの平坦面が作られており、断面形はV字形というより、中段に屈曲部をもつ箱薬研に似た形状が見て取れる。覆土は、屈曲部付近で大きく2層に分けられる。何れも締まりのない柔らかい土であるが、上層の1層が炭化物を含む黒褐色土で、遺物は全て本層中から出土するのに対し、下層の2層は壁(地山ローム層)の崩壊に起因すると思われるローム土を多量に混じており、遺物の出土もない。したがって、断面形状や覆土の状況からは、一度改修を受け、二時期に使用された可能性も考えられよう。

なお、発掘調査時の所見で、溝跡の北端部分で西壁が内側に入り込む状況があったことから、確実ではないが、A-A'の北側で東に曲がる可能性も考えられる。

(2) 土壌 (第22図)

土壌は、25基が検出された。形状は円形で、比較的浅い掘り込みのものが多く、調査区南側の谷部に集中している。何れも出土遺物はなく、所属時期は不明である。

第1号土壌 (第23図)

G-4グリッドの南端に位置する。南北に長い玉子形の掘り込みで、主軸方位は、凡そN-8°-Wである。長径90cm、短径60cm、深さ20cmで、底面は比較的平坦に作られている。覆土は、近くの第3・4号土壌と同じ黒色土であるが、それらとは形状が異なる点に注意される。北側で第2号土壌に切られている。

第2号土壌 (第23図)

G-4グリッドの南端に位置し、第1号土壌を切って作られている。形状は、直径40cmほどの円形で、深さは70cmと他の土壌に比してかなり深い。発掘調査時には、第1号土壌と重複関係にあり、覆土も近似した黒色土であったため土壌として処

理したが、位置や形状からはむしろ後述のピットに近く、覆土も第5・6号ピットの2層としたものに近似している(第25図)。

第3号土壌 (第23図)

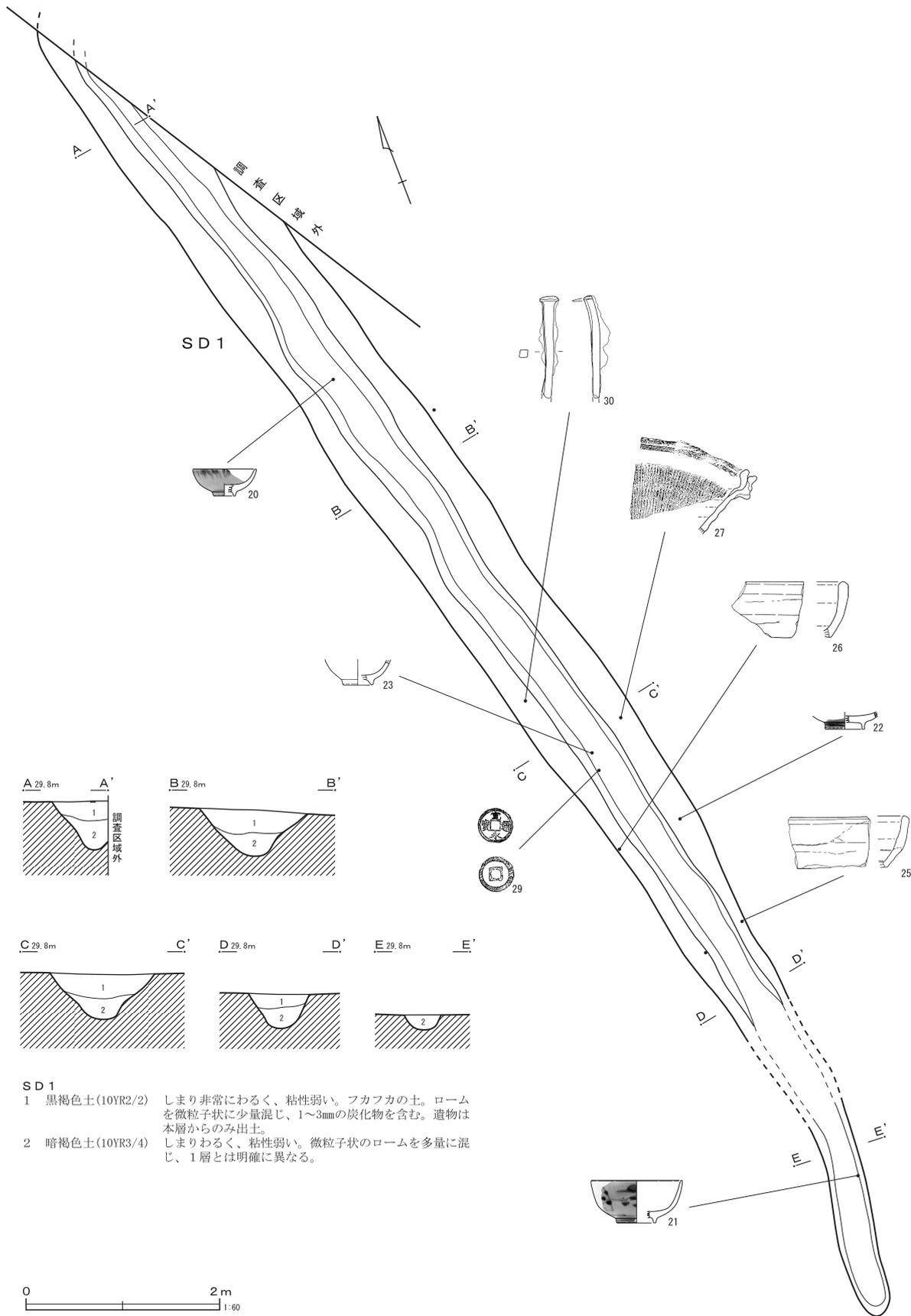
G-4グリッドの南側で検出された。形状は直径約110cmの円形で、底面は平坦に作られ、深さは16cmを測る。覆土はローム土を小ブロック状に含む黒色土であるが、埋め戻したものではない。

第4号土壌 (第23図)

G-4グリッドの南側、第1号土壌と第3号土壌の間に位置する。南に下る斜面に作られた浅い掘り込みで、北側の深さは10cmほどである。形状は、110cm×100cmほどの略円形を呈し、底面は平坦である。

第5号土壌 (第23図)

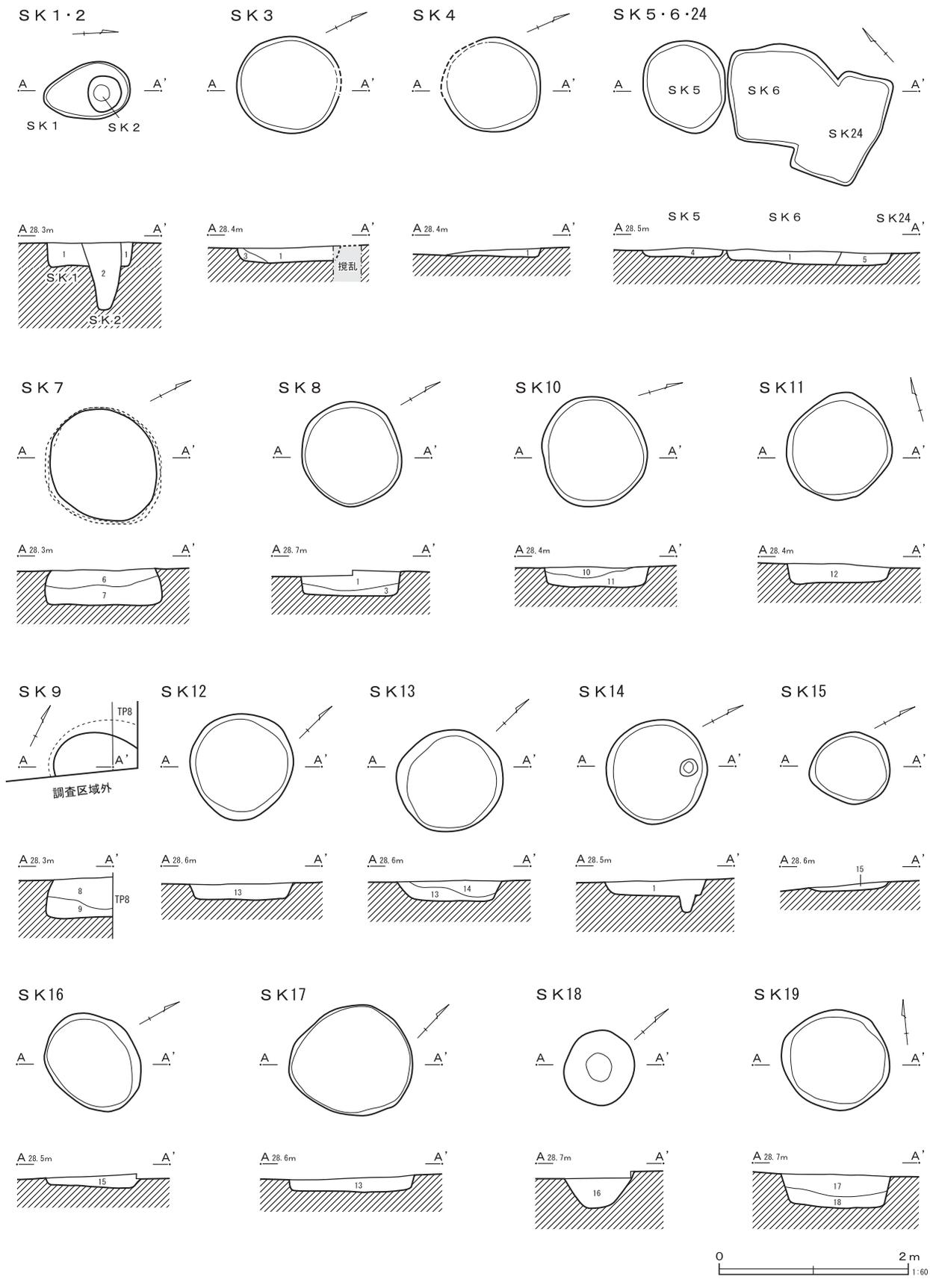
G-4グリッドの東寄り、第6号土壌に近接して検出された。形状は、長径100cm、短径90cmほどの不整楕円形で、深さ約8cmと浅い。



第21図 第1号溝跡



第22図 土壌・ピット配置図



第23図 土坑 (1)

第6号土壌 (第23図)

G-4グリッドの東寄りで、第24号土壌と重複して検出された。形状は、径110cmほどの不整形を呈するが、西側の攪乱に影響された部分もあり、本来は円形に近い形状を呈するものと思われる。深さは約12cmで、底面は平坦である。覆土は第4号土壌などと同様の黒色土で、出土遺物はない。

第7号土壌 (第23図)

G-4グリッドの南東隅、調査区南端に位置し、単独で検出された。形状は、長径134cm、短径110cmほどの楕円形を呈し、深さは約35cmと深い。内側が袋状に広がる土壌で、底面は平坦である。

第8号土壌 (第23図)

G-4グリッドの西隅に位置する。110cm×100cmほどの不整形で、西側半分を試掘時に削平を受けている。深さは30cm弱で、覆土は第3号土壌と同様の堆積を示している。

第9号土壌 (第23図)

G-5グリッド西端に位置し、調査区南東隅で他の土壌とは離れて検出された。第7号土壌と同様の袋状の土壌である。南側は調査区外、東側はトレンチが貫通するが、東壁土層にも確認されている(第6図)。その平面形状から推定すれば、長軸を東西にもち、長径110cm、短径80cmほどの楕円形となるようである。

第10号土壌 (第23図)

G-4グリッド東端に位置する。形状は、直径110cmほどの不整形円形を呈し、深さは約20cmで、底面は平坦である。覆土には茶褐色土を多量に混じており、他の土壌とはやや異なる。

第11号土壌 (第23図)

G-4グリッド南端で、第10号土壌の北側に位置する。形状は110cm×100cmほどの不整形円形で、深さは約20cmである。形状、覆土とも第10号土壌に近い。

第12号土壌 (第23図)

G-4グリッド北寄りに検出された。直径110

cmほどの円形で、深さは約20cmである。覆土は、黒色土と茶褐色土との混合層で、比較的13号土壌に近い。

第13号土壌 (第23図)

G-4グリッド北端で、第12号土壌の北東側に位置する。形状、覆土とも第12号土壌に近似する。

第14号土壌 (第23図)

G-4グリッド中央で検出され、第3号土壌の北側に位置する。直径110cmほどの不整形円形で、深さは約20cmである。覆土は締りの悪い黒色土で、第3号土壌に近い。なお、底面を精査したところ、北東部分で直径20cmほどの掘り込みを検出した。覆土は近似しており、新旧関係は不明だがピット群の一部の可能性もある。

第15号土壌 (第23図)

G-4グリッド西寄りに検出された。直径80cmほどの不整形円形で、深さも10cm程度と、他の土壌に比べて小型である。

第16号土壌 (第23図)

G-3グリッド東端で検出された。長径110cm、短径90cmで東西に長軸をもつ不整形楕円形を呈し、深さは10cmほどと浅い。覆土は、第15号土壌と同じである。

第17号土壌 (第23図)

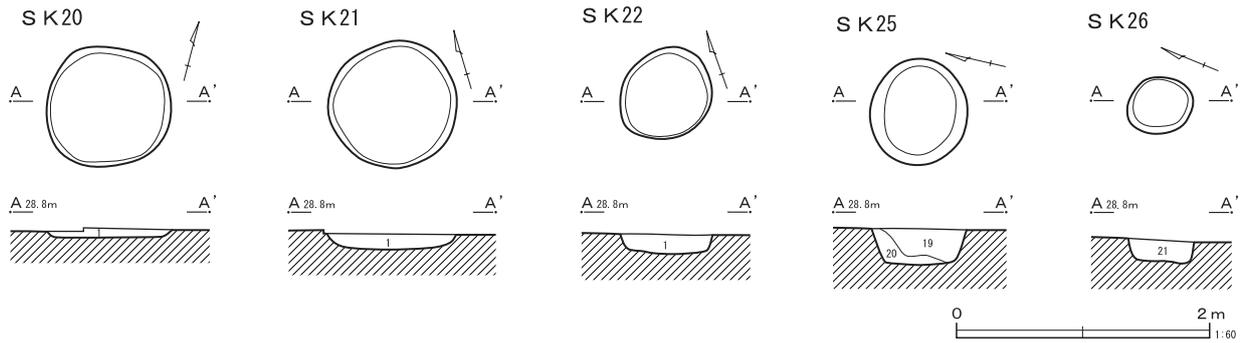
G-3グリッド中央で検出され、土壌群の西端に位置する。比較的大型の土壌で、130cm×115cmの不整形楕円形を呈し、深さは20cmほどである。覆土は、第12号土壌に近似する。

第18号土壌 (第23図)

G-3グリッド東端で検出された。80cm×70cm、深さ25cmと小型で深く、他の土壌とは異なるが、黒褐色土を主体とする覆土は、第19号土壌に近似する。

第19号土壌 (第23図)

G-4グリッド北西端で検出され、第18号土壌の東側に位置する。直径110cmほどの不整形円形を呈するが、深さは35cmと深めである。



SK

- | | |
|--|---|
| <p>1 黒色土(7.5YR1.7/1) しまりわるく、粘性有。黒色土を主体に、ソフトロームを1~3cm程のブロック状に混じる。</p> <p>2 黒色土(10YR1.7/1) しまりよく、粘性弱い。黒色土を主体に1~2cm程の明瞭なロームブロックを混ざる。</p> <p>3 黒色土(7.5YR2/2) しまり非常にわるく、粘性やや有。1層に近いがロームの混入少ない。</p> <p>4 極暗褐色土(7.5YR2/3) しまりわるく、粘性弱い。黒色土とロームの混土層(ロームは細かい粒子状)</p> <p>5 暗褐色土(7.5YR3/3) しまりややよく、粘性弱い。黒色土・茶褐色土・ロームの混土層。</p> <p>6 黒色土(7.5YR2/1) しまりよく、粘性弱い。ロームを微粒子状に混ざる。</p> <p>7 黒褐色土(7.5YR3/1) しまりややよく、粘性弱い。数mm~1cmのロームを多量に混じる。</p> <p>8 黒褐色土(7.5YR3/2) しまりややよく、粘性弱い。黒褐色土を主体に1~2cm程のロームブロックを少量混じる。</p> <p>9 黒色土(7.5YR2/1) しまりわるく、粘性弱い。ロームを少量混じるが、比較的均質でフカフカ。</p> <p>10 暗褐色土(7.5YR3/3) しまり非常によく、粘性弱い。谷部上位のてん圧の影響か微粒子状の茶褐色土を多量に含む。</p> <p>11 黒色土(7.5Y2/1) しまりわるく、粘性弱い。ブロック状に茶褐色土を混じる。</p> | <p>12 暗褐色土(7.5YR3/4) しまりややよく、粘性弱い。微粒子状にロームを比較的均一に混じる。</p> <p>13 極暗褐色土(7.5YR2/3) しまりわるく、粘性やや有。黒色土・茶褐色土・ロームの混土層。</p> <p>14 黒色土(7.5YR1.7/1) しまり非常にわるく、粘性強い。黒色土主体で少量のローム粒を混じる。</p> <p>15 黒褐色土(5YR2/2) しまりわるく、粘性やや有。黒色土を主体に数mm~1cm程のロームブロックを少量混じる。</p> <p>16 黒褐色土(7.5YR3/2) しまりややよく、粘性弱い。1~2cmの小ブロック状のロームを少量含む。</p> <p>17 黒褐色土(7.5YR2/2) しまりわるく、粘性弱い。極少量のロームをブロック状に混ざるのみで粒子類はなく、比較的均質な層。</p> <p>18 暗褐色土(7.5YR3/3) しまりわるく、粘性弱い。17層に近いが、1cm程のロームの混入多い。</p> <p>19 極暗褐色土(7.5YR5/3) しまりややよく、粘性弱い。白色微粒子をかなり含み、ロームを少量ブロック状に混ざる。微細な炭化物や赤色微粒子を僅かに含み比較的均質な層。</p> <p>20 暗褐色土(7.5YR3/4) しまりややわるく、粘性有。19層と地山ローム土との混土層。</p> <p>21 褐色土(7.5YR4/3) しまりややよく、粘性やや有。暗褐色土と地山ロームとの不均一な混土層。</p> |
|--|---|

第24図 土壌(2)

第20号土壌(第24図)

F-3グリッド南東隅で検出され、第2号住居跡の南東に位置する。形状は、直径100cmほどの不整形円形を呈し、深さは6cmほどと非常に浅く、西側の一部は試掘時のトレンチによって削平されている。第21・22号土壌と並んで検出され、覆土も極めて近い。

第21号土壌(第24図)

G-3グリッド北端で、第20・22号土壌と並んで検出された。直径約100cmの略円形を呈し、深さは15cmほどである。覆土は黒色土で、両側の土壌と極めて近似している。

第22号土壌(第24図)

G-3グリッド北寄り、第21号土壌の南西側に位置する。長径80cm、短径65cmで、深さは15cmほどである。第20・21号土壌と並ぶように検出され、黒色土の覆土も近似するが、他の2基と比べやや小型である。

第24号土壌(第23図)

G-4グリッド東寄りに検出され、北側で第6

号土壌と重複関係にあり、土層観察の結果第6号土壌より古いことが確認できた。形状は長径120cm、短径70cmの長方形で、深さは10cmほどである。覆土は、比較的締まりのよい暗褐色土で、形状、覆土とも他の土壌とは明瞭に異なる。

第25号土壌(第24図)

G-4グリッド南寄りに検出され、第4号土壌の北側に近接する。直径80cmほどの略円形を呈するが、深さは約30cmと深めである。覆土も、暗褐色土をベースにするが、炭化物や赤色粒子を含んでいるなど、形状・覆土とも周辺の第3・4・14号土壌などとは、明確に異なっている。

第26号土壌(第24図)

G-4グリッドの南西寄りに検出された。形状は長径55cm、短径45cmの楕円形を呈し、深さは18cmほどである。覆土は、締まりのよい褐色土で、発掘調査時には土壌として処理を行ったが、規模・覆土は他の土壌群とは明らかに異なっており、むしろピット群としたものに近いかもしれない。

以上のように、土壌群としたものは調査区南側

の谷部に集中して検出され、また、そのほとんどが、谷部の上層とした基本土層の2・3層の範囲内に含まれている(第5図)。また、明らかに異なる第2号土壌及び第24~26号土壌を別にすれば、何れも略円形で平坦な底面を持つ掘り込みで、覆土も近似している。因みに、これらを覆土で大別すれば、大きく黒色土をベースとする第1・3~7~9・10・11・14・20~22号土壌と、暗褐色土若しくは黒褐色土を基本とする第12・13・15~19号土壌に分けることができる。特に前者が、谷の中央部寄り(低い部分)にまとまっている状況は、あるいは構築の時間差に起因するものかもしれない。また、何れも覆土は比較的均質で、ブロック

状のローム土を混ざることもなく、掘削直後の埋め戻しを思わせる堆積も見られないが、集落域から離れた台地縁辺部に集中する点や、直径110cmほどの円形という極めて規格性の高い掘り込みが多い点からは、中世以降の墓墳の可能性も考えられよう。因みに、遺構確認面から地表面までは凡そ70cmほどあることから、これらの浅い土壌は、本来の掘り込みの底部付近に相当するものと考えられる。

なお、発掘調査時には遺構の直線的な配置が気になったが、南東に下る谷であることを考えれば、谷の等高線に平行する土壌の配列も見えてくるようである。

(3) ピット (第22・25図)

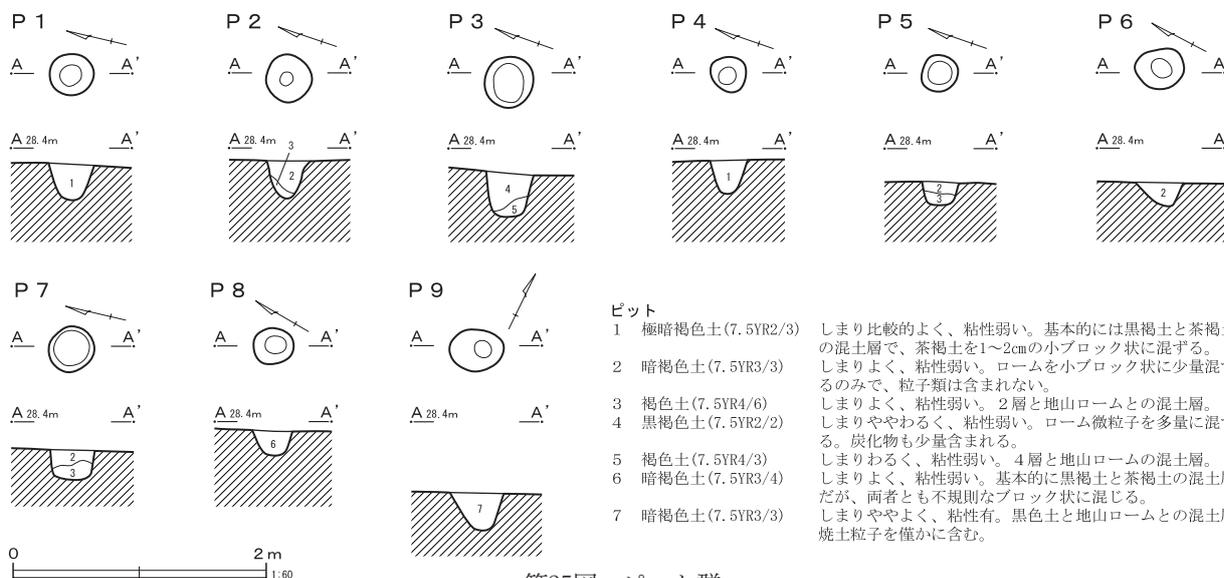
ピット若しくは小穴は、9基が検出された。何れも土壌と同様に谷部で検出され、多くが直径30~40cmほどの掘り込みで、P9をのぞけば確認面からの深さは20~30cmほどである。土壌の少な

い西側に集中している点が注意されるが、配列に規格性は認められない。出土遺物はなく、所属時期は不明である。

第2表 ピット計測表

(単位m)

ピットNo.	グリッド	長径	短径	底面標高	ピットNo.	グリッド	長径	短径	底面標高
P 1	G-3	0.34	0.32	27.98	P 6	G-4	0.39	0.32	27.94
P 2	G-3	0.36	0.36	28.00	P 7	G-4	0.36	0.34	27.94
P 3	G-3・G-4	0.38	0.37	27.85	P 8	G-4	0.30	0.29	28.13
P 4	G-3	0.30	0.26	28.04	P 9	G-4	0.42	0.33	27.53
P 5	G-4	0.28	0.27	27.95					



- ピット
- 1 極暗褐色土(7.5YR2/3) しまり比較的良好、粘性弱い。基本的には黒褐色土と茶褐色土の混土層で、茶褐色土を1~2cmの小ブロック状に混ざる。
 - 2 暗褐色土(7.5YR3/3) しまりよく、粘性弱い。ロームを小ブロック状に少量混ざるのみで、粒子類は含まれない。
 - 3 褐色土(7.5YR4/6) しまりよく、粘性弱い。2層と地山ロームとの混土層。
 - 4 黒褐色土(7.5YR2/2) しまりややわるく、粘性弱い。ローム微粒子を多量に混ざる。炭化物も少量含まれる。
 - 5 褐色土(7.5YR4/3) しまりわるく、粘性弱い。4層と地山ロームの混土層。
 - 6 暗褐色土(7.5YR3/4) しまりよく、粘性弱い。基本的に黒褐色土と茶褐色土の混土層だが、両者とも不規則なブロック状に混じる。
 - 7 暗褐色土(7.5YR3/3) しまりややよく、粘性有。黒色土と地山ロームとの混土層。焼土粒子を僅かに含む。

第25図 ピット群

(4) 中・近世の遺物 (第26・27図)

中・近世の出土遺物を一括する。第27図18～28・30は第1号溝跡からの出土であるが、その他は遺構に伴わず、表面採集もしくは包含層からの出土である。

1は、C-2グリッドから出土した焙烙の内耳部分である。残存高3.6cm、残存率5%。胎土は褐灰色で、石英・角閃石・白色粒子・赤色粒子・黒色粒子を含む。焼成は普通。

2は、C-2グリッドから出土した焙烙の内耳部分である。残存高4.8cm、残存率5%で焼成は良好。胎土は褐灰色で、白色粒子を含む。

3は、E-3グリッドからの出土。種別は磁器、器種は碗、瀬戸・美濃系か。残存高2.4cm、残存率5%。胎土は灰白色。焼成は良好。内外面とも透明釉で、内外面に染付けをもつ。轆轤成形。時期は19世紀前半と思われる。

4は、E-3グリッドからの出土。種別は磁器、器種は碗である。肥前系。残存高2.5cm、残存率5%。胎土は灰白色で、緻密である。焼成は良好。内外面とも透明釉、染付けは丸文と菊文。轆轤成形。時期は18世紀前半と推定される。

5は、表採遺物である。種別は磁器、器種は碗である。肥前系。口径(10.0)cm、残存高4.9cm、残存率20%である。胎土は灰白色で黒色粒子を含み、緻密である。焼成は良好。内外面とも透明釉で、染付けは花文と格子文である。轆轤成形。時期は18世紀中葉～後葉と考えられる。

6は、H-3グリッドからの出土である。種別は磁器、器種は鉢であると思われる。瀬戸・美濃系か。残存高3.1cm、残存率5%。胎土は灰白色。焼成は良好。内外面とも透明釉で、内外面に染付けをもつ。轆轤成形。19世紀代と考えられる。

7は、表採遺物である。種別は磁器、器種は端反りの碗である。瀬戸・美濃系と思われる。口径(7.4)cm、残存高2.9cm、残存率10%の小破片である。胎土は灰白色で、緻密である。焼成は良好。

外面とも透明釉で、染付けは一重圏線。轆轤成形。時期は19世紀前葉～中葉と考えられる。

8は、表採遺物である。種別は磁器、器種は碗である。肥前系。口径(8.4)cm、器高4.8cm、底径(3.2)cm、残存率20%。胎土は灰白色で、緻密である。焼成は良好。畳付以外の内外面に、透明釉が施されている。畳付に砂粒付着。轆轤成形。外面の染付けは草花文・一重圏線・二重圏線である。時期は18世紀前半と考えられる。

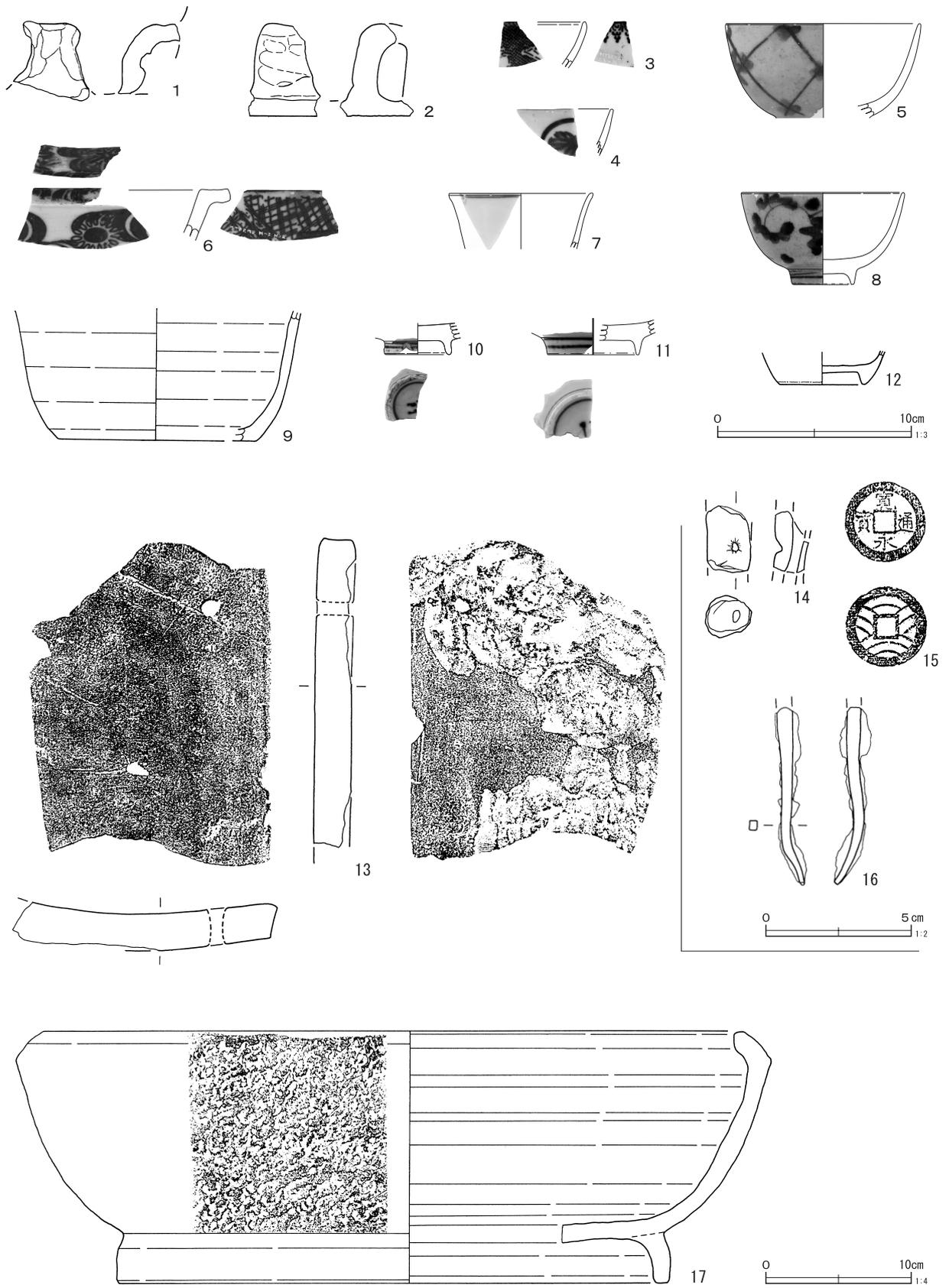
9は、H-4グリッドからの出土である。種別は土器で、器種は甕もしくは鉢と思われる。在地系。残存高6.7cm、底径(10.3)cm、残存率5%。胎土は褐灰色で雲母・石英を含む。焼成は普通。輪積み成形と思われる。

10は、表採遺物である。種別は磁器、器種は碗である。肥前系。残存高1.6cm、底径(3.4)cm、残存率30%である。胎土は灰白色で、緻密である。焼成は良好。畳付以外の内外面に透明釉。畳付に砂粒付着。轆轤成形。染付けは、高台際に二重圏線、高台内に一重圏線と銘(崩れ大明年製か)である。時期は18世紀代と考えられる。

11は、C-2グリッドからの出土である。種別は磁器、器種は碗である。肥前系。残存高1.8cm、底径(4.6)cm、残存率25%。胎土は灰白色で、緻密である。焼成は良好。畳付以外の内外面に透明釉。轆轤成形。染付けは一重・二重圏線・銘(崩れ大明年製か)。時期は18世紀代か。

12は、H-4グリッドからの出土である。種別は磁器、器種は瓶である。肥前系か。残存高1.7cm、底径4.4cm、残存率80%。胎土は灰白色で黒色粒子を含み、緻密である。焼成は良好。畳付以外の内外面に透明釉、畳付に砂粒が僅かに付着している。轆轤成形。時期は19世紀代か。

13は、調査区南西隅のH-3グリッドから出土した平瓦である。胎土は灰白色で、白色粒子・黒色粒子を含み、やや砂質である。焼成は普通。現



第26図 中・近世の出土遺物（1）

存長15.7cm、現存幅12.5cm、厚さ1.9cm、1箇所穿孔あり、孔径0.6cm。下面は剝離著しい。

14は、表採の不明土製品である。縦方向に穿孔、両端部は欠損。胎土は黄褐色で黒色粒子を含む。焼成は普通。現存長2.3cm、幅1.6cm、厚さ1.5cm、穿孔0.3cm。重さ3.5g。土錘か。

15は、E-3グリッドから出土した「寛永通宝」である。径2.8cm、厚さ0.1cm、重さ4.1g。遺存状況は比較的良好で、文字は鮮明である。

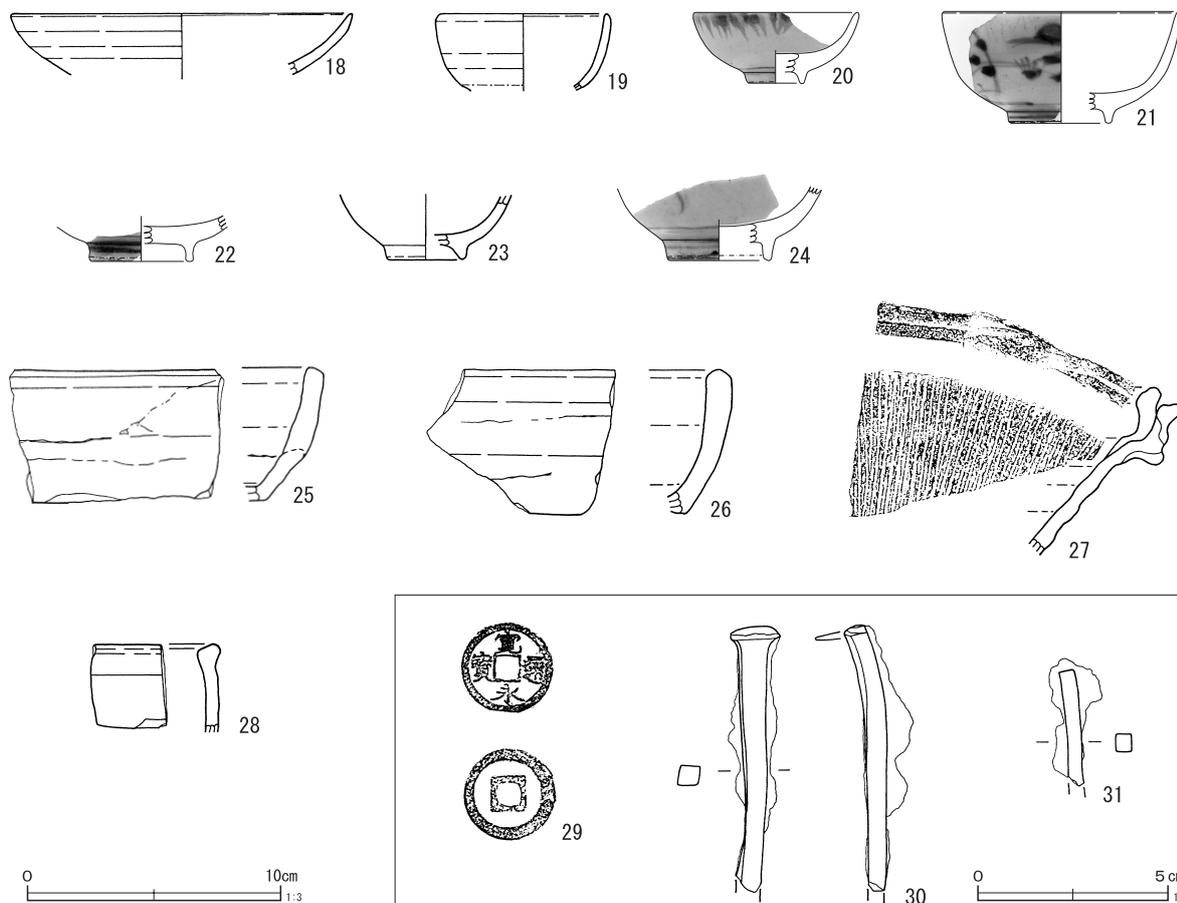
16は、G-4グリッドから出土した鉄製品である。銹化著しいが、鉄釘と推定される。現存長6.2cm、幅・厚さ0.3cm、重さ4.3g。

17は、H-3グリッドから出土した硬質瓦質土器である。養蚕火鉢、または掃立てと考えられる。前者の場合、蚕室暖房用の火鉢であり、多摩地方や埼玉県などで近代以降広く普及したものであ

る。後者の場合、養蚕で孵化した毛蚕を、蚕卵紙から羽箒で掃きおろして移す蚕座の意味となる。本例は内外面ともに、被熱の痕跡は認められない。胎土は、雲母・角閃石・石英・赤色粒子・白色粒子・黒色粒子を含む。焼成は普通。口径(48.0)cm、器高17.5cm、底径(38.7)cm、残存率30%である。轆轤成形か。

18は、第1号溝跡から出土した青磁皿である。口径(13.4)cm、残存高2.5cm、残存率15%である。胎土は灰白色で緻密である。焼成は良好。内外面ともに貫入が認められる。轆轤成形。中世の可能性も考えられる。

19は、第1号溝跡からの出土である。種別は陶器、器種は碗である。瀬戸・美濃系。口径(6.8)cm、残存高3.0cm、残存高2.5cm、残存率10%の小破片である。胎土はにぶい黄橙色で白色粒子・黒



第27図 中・近世の出土遺物(2)

色粒子を含み、焼成は普通。内外面とも透明釉で、貫入が認められる。轆轤成形。時期は19世紀前半と思われる。

20は、第1号溝跡からの出土である。種別は磁器、器種は小坏である。肥前系。口径(6.6)cm、器高2.8cm、底径(2.2)cm、残存率25%。胎土は灰白色で赤色粒子・黒色粒子を含み、焼成は良好。畳付以外は内外面とも透明釉。見込みに釉溜まり、外面には貫入が認められる。轆轤成形。染付けは、口縁部が雨降り文、高台脇と高台際が一重圏線である。時期は18世紀前半と思われる。

21は、第1号溝跡からの出土である。種別は磁器、器種は碗である。肥前系。口径(9.4)cm、器高4.4cm、底径(3.8)cm、残存率15%。胎土は灰白色で黒色粒子を含み、緻密である。焼成は良好。畳付以外は内外面とも透明釉で、両面に貫入が認められる。畳付に、僅かに砂粒が付着している。轆轤成形。染付けは胴部が草花文、高台脇が一重圏線、高台際が二重圏線である。時期は18世紀前半と思われる。

22は、第1号溝跡からの出土である。種別は磁器、器種は碗である。肥前系。残存高1.8cm、底径(4.1)cm、残存率20%。胎土は灰白色で、黒色粒子を含み緻密である。焼成は良好。畳付以外は内外面とも透明釉で、畳付には砂粒が付着している。轆轤成形。染付けは高台脇が一重圏線、高台際が二重圏線である。時期は18世紀代か。

23は、第1号溝跡からの出土である。種別は磁器、器種は碗である。肥前系。残存高2.6cm、底径(3.0)cm、残存率20%。胎土は灰白色で白色粒子・黒色粒子を含み、緻密である。焼成は良好。畳付以外は、内外面とも透明釉。轆轤成形。時期は18世紀代と思われる。

24は、第1号溝跡からの出土である。種別は磁器、器種は碗である。肥前系。残存高3.0cm、底径(3.9)cm、残存率25%。胎土は灰白色で白色粒子を含み緻密である。焼成は良好。畳付以外は内外

面とも透明釉。畳付に砂粒が付着している。胴部の染付けは草花文か。高台脇と高台内に一重圏線、高台際に二重圏線である。轆轤成形。時期は18世紀中葉～後葉と思われる。

25は、第1号溝跡から出土した焙烙である。器高5.2cm、残存率5%。胎土は褐灰色で、雲母・石英・角閃石・白色粒子・黒色粒子を含む。焼成は普通。外面には僅かに煤が付着している。

26は、第1号溝跡から出土した焙烙である。器高5.7cm、残存率5%。胎土は褐灰色で、石英・角閃石・白色粒子を含む。焼成は普通。外面には煤が付着している。

27は、第1号溝跡からの出土である。種別は陶器、器種は播鉢である。片口部分を有す。京・信楽系か。残存高6.7cm、残存率5%の小破片である。胎土は褐灰色で、石英・白色粒子・黒色粒子を含む。焼成は良好。内外面に銹釉。内面と外面口縁部付近に自然釉が掛かかる。畳付に砂粒が僅かに付着している。轆轤成形と推定される。卸目は8本/条。時期は18世紀代と思われる。

28は、第1号溝跡からの出土である。種別は陶器、器種は香炉である。瀬戸・美濃系。残存高2.3cm、残存率5%の小破片である。胎土は浅黄色。内外面とも銹釉で、焼成は普通。轆轤成形。時期は18世紀中葉と思われる。

29は、第1号溝跡から出土した「寛永通宝」である。径2.4cm、厚さ0.1cm、重さ3.0g。遺存状況は比較的良好で、文字も鮮明である。

30は、第1号溝跡から出土した鉄製品である。銹化著しいが、釘と推定される。現存長7.0cm、幅・厚さ0.5cm、重さ10.7g。

31は、第1号住居跡から出土した鉄製品である。銹化著しいが、釘と推定される。現存長3.0cm、幅0.4cm、厚さ0.5cm、重さ2.8g。

V 調査のまとめ

1. 松原前遺跡の成果と課題

松原前遺跡は入間台地に立地し、微視的には高麗川の形成による坂戸・鶴ヶ島台地の東南端に位置する。県道川越坂戸毛呂山線を川越方面から辿ると、入間川から僅かな勾配を保ってきた道は小畔川を過ぎた辺りから次第に傾斜を増し、台地が立ち上がる様子が実感される。台地は、一旦大谷川（支流）で下がった後、遺跡付近から再び傾斜を増してゆくが、このように南北を大谷川（本・支流）に挟まれた微高地の南斜面という恵まれた立地環境にありながら、遺跡周辺の発掘調査例は少なく、考古学的状況は必ずしも明らかではなかった。しかし、近年の圏央道建設に伴う一連の発掘調査等によって、旧石器時代から近世まで幅広い時代の知見が急増しつつあり、本遺跡も縄文時代および中・近世において貴重な調査事例を加えることとなった。

特に、住居跡2軒が発見された縄文時代前期中葉については、いわゆる有尾系の土器が主体的に出土しており、ほとんど他事期の遺物を混じらない点は注意される。市内では、お寺山遺跡や雷電池東遺跡などで黒浜期の土器片が出土しているのみであり、住居跡を確認できた本遺跡は貴重な調査事例となろう。

なお、2軒の住居跡は重複関係にあり、土層断面の観察から第1号住居跡の方が新しいと判断したが、出土した遺物から見ても、第2号住居跡には櫛歯状工具を用いた第17図2や工具を立てて爪形文を施文（刺突）する5・7・11があり、また直前段合燃の施文例が多いなど、第1号住居跡に比べて古相を示すものが目立つようである。

住居跡の南側で検出された谷部は、基本土層で2・3層とした黒褐色土（第6図）の広がりでも明瞭に把握することができ、ほぼ南東方向に向かって深くなるものと思われる（第5図）。但し、谷の

最上位の2層および3層上半から、住居と同時期の遺物が多量に出土していることから、該期には谷は完全に埋まりきっておらず、また3層の状況から、滞水もしくは湿地のような状態であったと推定される。なお、遺跡の南を北東に流れる大谷川の支流とは200mほどを隔てているに過ぎず、この谷部も同河川の旧河道に関連するものかもしれない。

また、今回は重複した2軒の住居跡が検出されたのみであるが、同期の遺物が住居跡外からも多量に出土し、特に住居跡の南東側でまとまって見つかっていることから、集落自体は谷に沿って東方向に広がるものと予想される。

なお、前期中葉の土器群に混じって早期後葉の土器片が1点だけ出土している（第20図32）。G-4グリッド北東部の3層上面から検出された比較的大きな破片で、いわゆる貝殻条痕文系土器群後半の茅山上層式と思われる。条痕文系の土器は、市内でも前述の2遺跡のほか泉橋遺跡や鶴ヶ島中学西遺跡など数遺跡で出土しており、今後遺構の発見が期待される。

以上、本遺跡では縄文時代、特にその前期中葉において大きな成果を上げることができたが、もう一つの成果として、調査区北側で検出された第1号溝跡にも触れておく必要がある。

遺跡南側の大谷川から緩やかに傾斜を増した地形は、調査区を過ぎたあたりからやや平坦な雑木林となるが、本溝跡はちょうどその境付近で検出された。斜面の傾斜に従って南北に直線的に走り、また規模も大きくしっかりと造られた溝で、何れかの館若しくは屋敷に伴うものと思われる。

ところで、本遺跡の所在する五味ヶ谷地区は、中世における広谷郷が、近世に至って上広谷村・下広谷村とともに五味ヶ谷村として分割されたも

のである。広谷郷の在地領主的存在としては、扇谷上杉氏に連なるとされる岸田一族が著名であるが、岸田氏は上広谷の本村を拠点とし(第2図27)、また近世初期に分家が五味ヶ谷村に居を移すが(同図2)、何れも本遺跡とはやや離れており、関連は薄いようである。むしろ、戦国末(天正年間)に五味ヶ谷に土着したとされる滝島一族(滝島内

膳?)の流れを汲む諸家に関わるものかもしれない。残念ながら滝島氏については資料も少なく、その詳細については未だ明瞭にされていないが、調査区付近には「熊大尽」と呼ばれた滝島氏(滝島熊蔵か)の屋敷があったと伝えられており、今後の調査が期待される。

2. 縄文時代前期中葉の土器について

今回の調査では、II-2で既に述べたように鶴ヶ島市域で初めて縄文時代前期中葉、黒浜期の竪穴住居跡を検出できたことが特筆されよう。しかも、同時期の重複ながら新旧関係がはっきりしており、それぞれの住居跡に帰属する良好な一括資料が得られたことは成果として大きい。

ここでは周辺市町村で検出された該期の住居跡出土土器を概観し、本遺跡のそれとを比較、検討し、今回出土した土器の特徴を明らかにしていきたい。但し、縄文時代前期中葉、黒浜期の住居跡は鶴ヶ島市域のみならず、入間台地・武蔵野台地北東部に立地する周辺市町村においても類例が少なく、資料的制約は否めないことを先述しておきたい。

入間台地の北東部、坂戸台地に立地する坂戸市域では、圏央道関係で調査が行われた御新田遺跡、番匠・下道遺跡で該期の遺構が検出されている。御新田遺跡では住居跡1軒、土壙3基、番匠・下道遺跡では住居跡1軒、土壙9基である。両遺跡とも住居跡からの出土土器はわずかな破片のみで、器形の復元可能な資料は得られなかった。しかし、番匠・下道遺跡では、櫛状工具を用いた列点状刺突文で菱形をモチーフとした文様を描いた土器片が検出されていることから、神ノ木式との関連がうかがえる。

武蔵野台地北東部の川越市域では、台地東縁辺部の小仙波四丁目遺跡から該期の住居跡が5軒確認され、そのうち2軒(15、17号住居跡)からは

器形復元可能な個体が出土している。住居跡出土土器の多くは、単節や無節の原体を横位施文した斜縄文構成の土器であるが、半截竹管状工具を用いた文様帯を持つものもわずかながらみられる。器形復元土器のうちの1点も口縁部に文様帯を有し、半截竹管状工具で平行沈線をそれぞれ2条ずつ廻らせて文様帯の上下区画とし、平行沈線には棒状工具様のもので引きずりながら刺突を行っている。区画内には同様の引きずり刺突文で菱形をモチーフとした文様を描出しており、その末端は渦巻き状を呈する。胴部には無節縄文を単一方向に施文する。文様帯を有することから有尾式土器の影響を受けていると考えられ、刺突文から黒浜式でも古い様相を看取できる。

坂戸台地の西部に位置する毛呂台地上の毛呂山町域では、松の外遺跡で該期の住居跡が1軒検出されている。調査は住居跡全体の50%ほどであったが、土器がつぶれた状態で一括出土し、器形復元可能な土器だけで25点にのぼる良好な一括資料を提示している遺跡である。ここでは、その出土状態から「床面直上の群」、「覆土中の群」に分類している。「床面直上の群」では半截竹管状工具によって施文した平行沈線上に別工具で刺突したり、櫛歯状工具で条線を描出することにより口縁部文様帯を表出する個体があげられる。また「覆土中の群」では「いわゆる格子目文系土器」があげられており、より厳密に共伴関係を把握した結果、それらは相対的な時間差を示していることが

確認された。また、器形復元された土器の約1/3にあたる8点は文様帯を有するものであり、信州から北関東に分布する有尾式土器に由来する有尾系の土器群である。

最後に、今回の松原前遺跡であるが、器形復元可能な土器が第1号住居跡からは4点(第11図1、2、3、4)、第2号住居跡からは、胴部下半から底部にかけてであるが1点(第17図1)、の合計5点検出された。第1号住居跡は、住居跡のほぼ全範囲にわたり床面直上から土器片が出土し、器形復元できた個体は特に大形の破片がまとまった状態で検出された。床面直上からの出土ということで、住居跡に直接伴う遺物と考えてよいだろう。それに対して第2号住居跡では、住居跡中央部にまとまって、床面からやや浮いた状態で小破片が検出された。大形破片が少ないことも第1号住居跡と異なる点である。住居廃絶後、堆積がある程度進んだ段階での廃棄遺物と考えられる。

両住居跡の新旧関係は、VI-1で述べたとおり、第2号住居跡の方が古く、その様相が出土遺物からも看取される。第17図10のように櫛歯状工具による縦位刺突文は神ノ木式からの影響と考えられることから前期中葉でもかなり古相を示すものであろう。

引用・参考文献

- 会田 明他 1980『宮廻遺跡』富士見市遺跡調査報告第10集 富士見市遺跡調査会
新井和之 1979「黒浜式土器研究の問題点」『土曜考古』創刊号 土曜考古学研究会
新井和之 1982「黒浜式土器」『縄文文化の研究3』 雄山閣
新井和之 1983「黒浜式土器小考追録(その2)」『土曜考古』第7号 土曜考古学研究会
新井和之 1985「黒浜式土器研究の現状と今後の課題」『土曜考古』第10号 土曜考古学研究会
岩瀬 譲 1985『鶴ヶ丘(E区)』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第45集
伊藤研志・加藤恭朗 1981『勝呂廃寺』坂戸市教育委員会
伊藤研志他 1983『坂戸市史』原始資料編 坂戸市
内田正英 2007「10.川越市古海道東遺跡(第1次)の調査」『第40回遺跡発掘調査報告会発表要旨』 埼玉考古学会
大谷 徹 2008『宮廻館跡』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第354集
奥野麦生 1989「黒浜式土器の系統性とその変遷」『土曜考古』第13号 土曜考古学研究会
加藤恭朗他 1985『附島遺跡』附島遺跡発掘調査報告書I 坂戸市教育委員会
加藤恭朗他 1987『古代のさかど』坂戸市遺跡発掘調査概報I 坂戸市教育委員会
加藤恭朗・北堀彰男・柳楽 理 1989『勝呂廃寺』坂戸市遺跡発掘調査団

また、第1号住居跡出土遺物は、口縁部文様帯を有する土器の爪形文の押し引き技法について、斜め方向からの浅い連続刺突が多いことから、若干の新しい様相を含んでいるものの、第11図2のように波頂部下に三角形の文様を擁することからやや古相と考えてよいだろう。また、縄文のみで構成される土器も、第11図3のように縄文で菱形を意識する施文を行っているので同様に考えられる。

ここでは松原前遺跡周辺の入間・武蔵野台地北東部に所在する縄文時代中期中葉の遺跡について概観してきたが、この地域全体に共通していることは、半截竹管状工具を用いた爪形文で口縁部文様帯を描いた土器が比較的多く出土しているということである。これは信州から北関東にかけて、この時期に分布している有尾式土器の影響と考えられる。恐らく北関東地域を経由して関東山地伝いに入間・武蔵野台地北東部にもたらされたものであろう。また、信州からの影響はその前段階の神ノ木式段階からわずかに認められており、その萌芽と想定される。しかし、この地域の該期資料は類例が少ないため、新資料の増加を期待するとともに、北関東地域との影響関係の解明を今後の課題としたい。

- 加藤恭朗・北堀彰男・柳楽 理 1991『坂戸市遺跡群発掘調査報告書Ⅲ集』 坂戸市教育委員会
- 加藤恭朗 1997『景台遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 坂戸市遺跡発掘調査団
- 加藤恭朗 1999『景台遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 坂戸市教育委員会
- 加藤恭朗 2005『若葉台遺跡発掘調査報告書Ⅵ』 坂戸市教育委員会
- 金子直行 1989「縄文前期中葉における大形菱形文系土器群の成立と展開」『埼玉考古』第25号 埼玉考古学会
- 川越市教育委員会 2005『川越市文化財保護年報』平成16年度
- 木戸春夫 2004『戸宮前/在家/宮廻』 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第297集
- 黒坂貞二 1998『富士見一丁目遺跡』 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第189集
- 黒坂禎二 2008『牛原/御新田/番匠・下道/横沼新田/北谷』 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第353集
- 小泉 功他 1972『川越市史』第一巻 原始古代編
- 小泉 功 1993『小仙波四丁目遺跡（第5次）発掘調査報告書』 川越市遺跡調査会第12集
- 埼玉県立歴史資料館 1988『埼玉の中世城館跡』 埼玉県教育委員会
- 斉藤 稔 1978『脚折遺跡群第二次発掘調査概報』 鶴ヶ島町教育委員会
- 斉藤 稔 1997『向山遺跡 仲山遺跡 浅間塚 新右衛門遺跡第6次調査 発掘調査報告書』 鶴ヶ島市遺跡調査会
- 斉藤 稔他 1985『雷電池並びに周辺調査報告書』 鶴ヶ島町教育委員会
- 斉藤 稔他 1985b『お寺山遺跡発掘調査報告書』 鶴ヶ島町教育委員会
- 斉藤 稔他 1993『新右衛門遺跡 第3次発掘調査報告書』 鶴ヶ島市教育委員会
- 斉藤 稔・早川由利子 1998『鶴ヶ島中学西遺跡第2次調査 発掘調査報告書』 鶴ヶ島市遺跡調査会
- 斉藤 稔・早川由利子 1998b『新右衛門遺跡第7次調査 発掘調査報告書』 鶴ヶ島市遺跡調査会
- 斉藤 稔・早川由利子・小林貴郎 1999『当貫遺跡発掘調査報告書』 鶴ヶ島市遺跡調査会
- 斉藤 稔・早川由利子 2000『お寺山遺跡O地点・内野氏屋敷発掘調査報告書』 鶴ヶ島市遺跡調査会
- 斉藤 稔・関口陽子 2002『北権現遺跡1・2次調査 発掘調査報告書』 鶴ヶ島市埋蔵文化財調査報告第50集
- 斉藤 稔・早川由利子 2002『小萱野遺跡・高倉館 発掘調査報告書』 鶴ヶ島市埋蔵文化財調査報告第51集
- 坂戸市教育委員会 1991『坂戸市遺跡群発掘調査報告書Ⅲ集』
- 篠田泰輔 2008『木曾免遺跡』 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第352集
- 島村薫・植松剛 2002『木津内貝塚・向山遺跡』 杉戸町文化財調査報告第6集
- 島村薫・植松剛 2003『鷺巣前原遺跡』 杉戸町文化財調査報告第8集
- 清水理史 2003『地慶沼遺跡第1～3次発掘調査報告書』 鶴ヶ島市埋蔵文化財調査報告書第52集
- 清水理史 2007『北権現遺跡3次調査 発掘調査報告書』 鶴ヶ島市埋蔵文化財調査報告第60集
- 関口和也 1990「埼玉県川越市大字下広谷の城址群」『中世城郭研究』第4号 中世城郭研究会
- 関口陽子 2003『泉橋遺跡第1次調査 三ツ木屋敷第2次調査』 鶴ヶ島市埋蔵文化財調査報告書第54集
- 田中英司 1995『横田遺跡』 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第163集
- 谷井 彪 1976『鶴ヶ丘』 埼玉県遺跡発掘調査報告書第8集 埼玉県教育委員会
- 鶴ヶ島町 1987『鶴ヶ島町史』通史編 鶴ヶ島町史編さん室
- 鶴ヶ島町 1991『鶴ヶ島町史』原始・古代・中世編 鶴ヶ島町史編さん室
- 鶴ヶ島町 1990『鶴ヶ島町史』自然編Ⅰ 鶴ヶ島町史編さん室
- 西井幸雄 1995『柳戸/新山/向山/青棚/光山遺跡群』 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第154集
- 早川由利子1997『鶴ヶ島中学西遺跡発掘調査報告書』 鶴ヶ島教育委員会
- 蓮田市教育委員会 1991『黒浜貝塚群天神前遺跡』 埼玉県蓮田市文化財調査報告書第17集
- 昼間孝次 1987『黒浜貝塚群宿上貝塚 御林遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査報告第16集
- 富士見市教育委員会 1995『水子貝塚』 富士見市文化財報告第46集
- 村木功 1987『松の外遺跡・西戸古墳群』 毛呂山町埋蔵文化財調査報告第4集
- 村木功・佐藤春生1998『松の外遺跡・西戸古墳群』 毛呂山町埋蔵文化財調査報告第17集
- 村端和樹 2007『戸宮前Ⅱ/在家Ⅱ』 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第342集